

関山

かんざん

第10号



寺報 中尊寺

関
山

中尊寺〈寺報〉第十号

平成十五年(二〇〇三)十二月



〈発行 中尊寺〉

目次

寺報ぐらびあ	貫首	千田 孝信	12
怨念の浄化こそ平和への道			
「てのひらのエッセー」より			
花咲け みちのく地に実れ	渡辺 皓介	15	
能楽対談「当地ならっではの能も」	佐々木宗生		
	吉越 研	17	
ひらく	千葉万美子	26	
水辺空間と歴史的風土（近江秋目）	佐々木邦世	29	
平泉を訪ねて	峰 覺雄	33	
白山神社能舞台の重文指定に寄せて	北嶺 澄照	36	
四寺廻廊―慈覚大師を御縁として―	菅野 澄円	47	
叡山講福聚教会東日本大会に参加して	菅野美弥子	50	
研究／出版			
風信／語録			
関山句囊			
陸奥教区宗務所報 第二部 中尊寺関係			
執務日誌抄			
御奉納者御芳名			
浄財御奉納者御芳名			
不動尊篤信御奉納者御芳名			

〈表紙〉
 「四寺廻廊」慈覚大師報恩法要（立石寺）
 （記事は本誌四七ページに）
 〈扉〉
 中尊寺能「枕慈童」
 （平成二年十一月三日）

後記

▽今年、世界各地で異常気象が観測されたようだ。ここ東北地方も冷夏のために平成五年以来の凶作となり稲作が大打撃を受けた。国内では目を覆いたくなるような事件が頻発し、海外では飢餓やテロ、悲惨なできごとが目立った一年。来る年が世界中の人にとって平穏無事で五穀豊穡の年であってほしい。
 ▽竹生島宝厳寺管主峰覺雄師をはじめ本誌発行に御協力いただいた方々に感謝申し上げます。
 〔北嶺澄照〕

中尊寺〈寺報〉「関山」第十号
 平成十五年（二〇〇三）十二月十五日
 発行 中尊寺
 （執事長 佐々木邦世）
 〒〇二九―四一九五
 岩手県平泉町字衣関二〇二
 編集 中尊寺仏教文化研究所
 印刷 川嶋印刷(株)



四寺廻廊(6月12日)

ともに慈覚大師を開基とする中尊寺・毛越寺・瑞巖寺(宮城県松島町)・立石寺(山形市)の四寺が連携していこうという取り組みがスタートした。

記事は本誌47ページに収録。



四寺を巡礼する歓びのひとつとして四寺廻廊用の御朱印が特に調製され、酒井雄哉大行満によって御加持された。



四寺廻廊をスタートさせるに先立って立石寺根本中堂で慈覚大師報恩法要が営まれた。



四寺廻廊の巡礼では専用の御朱印帳に特に調製された御印を頂戴できる。



福聚教会中尊寺・毛越寺支部、平成15年度東日本奉詠舞大会唱詠の部で優勝、詠舞の部で3位入賞(写真は詠舞の部)。記事は本誌50ページに。



今年度から中尊寺菊まつりに国土交通大臣賞が設けられた。



貫首 『花咲け みちのく 地に実れ』 を出版

晋山以来10年の間に書かれた文章、講演記録を収めた本が出版された。



来場の方々に挨拶される貫首。



9月21日には出版祝賀会が開催された。
発起人を代表して挨拶を述べられた松岡昭治氏。



出版祝賀会に先立って行われた記者会見のようす。



祝辞を述べられる志賀かう子氏。

再建150年・重要文化財指定記念特集



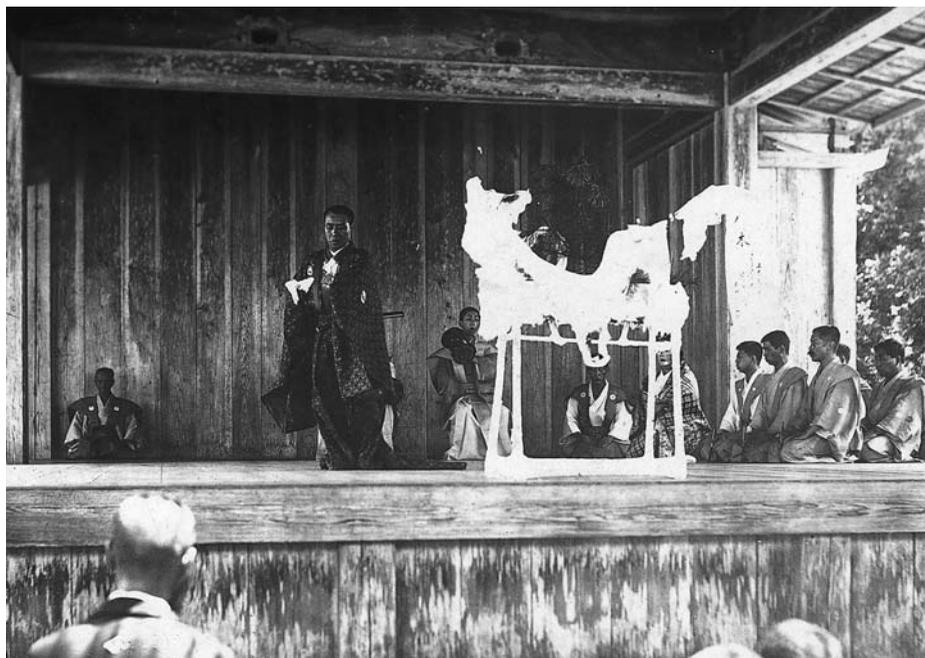
中尊寺新能 (昭和57年8月14日)
能「道成寺」 佐々木宗生師



中尊寺新能 (平成11年8月14日)
狂言「三本柱」 野村万作師・萬斎師

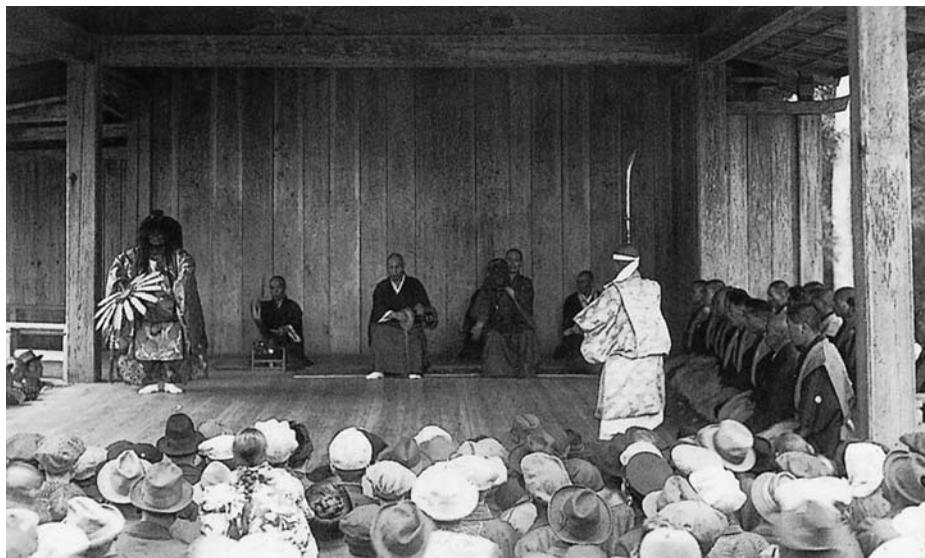


中尊寺新能 (平成15年8月14日)
能「羽衣」 佐々木多門師



能「鉢木」喜多六平太氏（明治42年8月6日）

明治時代の貴重な写真。能舞台の鏡の松は昭和22年に能画家松野奏風師の彩管になるもので、それ以前にはなかったのである。



源九郎判官義経公750年御遠忌祭典 奉納能「鞍馬天狗」（昭和13年5月15日）



白山神社能舞台鏡の松

昭和22年、能画家松野奏風師の彩管になるもので、山内円乗院の老松を写し画かれた。



御神事能「黒塚」(昭和30年代)



御神事能「秀衡」(昭和40年代)

昭和26年11月に白山神社能舞台で初演された新作能で、中尊寺の能番組には欠かせないものとなっている。



中尊寺能 狂言「附子」(平成10年11月3日)



御神事能「竹生島」(平成15年5月4日)



御神事能「西王母」(平成14年5月5日)



中尊寺能「土蜘蛛」(平成13年11月3日)

株分けした中尊寺ハスが開花



8月3日には現地で観賞会が開かれた。

昨年5月10日、北上市和賀町にある多聞院伊沢家住宅（重文）地内の池に中尊寺ハスが株分けされた。近くには奥州藤原氏に關係する伝承を持つ古道「秀衡街道」があり、その顕彰活動の一環として地元の方々が希望されたのに応じてのことだった。

昨年は池の水の温度がやや低かったことと、台風によりハスの立葉が傷んだために開花しなかったが、今年は池の周囲に黒いホースを設置し、温めた水を注ぐよう工夫した結果、順調に育成し、みごとに開花した。



異常気象のため実際の開花は観賞会の翌日となったが、みごとな花が咲いた（8月5日撮影）。



観賞会の後には執事長が「歴史の中に何が見えたか」と題し、講演を行った。





春の藤原まつり 源義経公東下り行列（5月3日）
今年の藤原秀衡公役は岩手県知事増田寛也氏だった。



世界遺産塾 7月12日
世界遺産塾に参加している子供たちが中尊寺を訪れた。写真はかんばん亭で体験学習する子供たち。



JMP 古代都市平泉巡検（7月13日）
東大史料編纂所主催のJMP（前近代日本の史料遺産プロジェクト）に参加した国内外の研究者多数が来山された。



トヨタ名誉会長
豊田章一郎氏ほか来山
(8月14日)

川西大念佛剣舞子ども
同好会来山 (8月24日)
衣川村の小学生たちが施餓
鬼会に剣舞を奉納した。



中国天台山国清寺一行来山 (8月28日)



熊本市内で「中尊寺と平泉の文化展」を開催



会場には不動尊がお祀りされ、開会前に入魂法要が営まれた。

本年9月3日から9日まで一週間にわたり九州の熊本市において「中尊寺と平泉の文化展」が開催された（主催：熊本日日新聞社。会場：熊本市鶴屋百貨店）。開催希望の申出を頂戴してから開催まで2ヶ月しかなかったが、寺側と主催者側が緊密な連携をとり実施、期間中には1万4千人もの方々が入場され成功裡に終了した。



今回の展示のため特に中尊寺ハスの標本が作成された。



9月3日には貫首の講話会も開催された。



寺の人間が熊本へ出向き、会場で説明するように今回は努めた。



展示を熱心にご覧になる入場者の方々。

怨念の浄化こそ平和への道

貫首 千田孝信

大阪池田小児童殺傷事件などの傷ましい事犯が、最近では日常茶飯事のように頻発している。被害者の親の身になってみれば、怨み辛みの思いは容易に消えるものではないだろう。

歴史上あまたの悲劇を引くまでもなく、殺生による心の傷痕は測りしれないほど深く、怨恨からの復讐行為は再び新しい怨念を生んで果てることがない。まこと、怨みに報いるに怨みを以てすれば怨みは尽きることがないのであり、積尊が五戒の第一に不殺生を掲げた所以もここにある。

眼を世界に向ければ、中東のイスラエルとパレスチナの怨念の連鎖は、益々増幅して陰惨の度を深めつつある。そして今回のアフガン・イラク戦争後の中東の治安は、自爆テロの連鎖を伴って一刻の予断も許さない。アメリカと国際的テロ組織アルカイダとの対立、あるいはアメリカグローバリズムとイスラム・アラブ原理主義との対立構造は、9/11以来、一神教同志の宗教的対決になりかねない危機を孕んでいる。さらに極東では、日本の近隣諸国は被侵略の怨恨をあらわにして隠そうともしない。二十世紀末に折角ベルリンの壁が崩れて冷戦が終わったのに、二十一世紀は、うっかりすると「怨念（ルサンチマン）の世紀」になりかねない惧れがある。

ここで、鮮烈な印象で想起するのが、十二世紀初頭における、わが奥州藤原初代清衡公の高貴なる

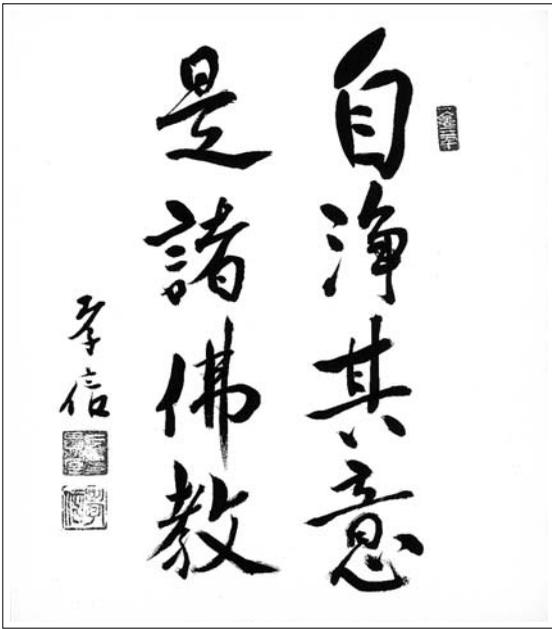
決断である。その前半生でさながらの地獄を体験した清衡公は、熟慮の末、決然として非戦を志向し、戦争ではなく平和を、要塞ではなく寺院を選択したのであった。この選択の正しきゆえに、その後の一世紀、奥州藤原一門が平泉に創造した黄金の仏教文化は、いま世界遺産に擬せられる高い評価を得ているのだ、と私は思う。

その栄光の蔭には、実は清衡公の、誰にも明かさないう苦ししい内面の営みがあった筈だ。鋸のような鈍刀で斬首された父経清の痛哭の声をどうして忘れ得たろうか。種違いの弟に寝込みを襲われて惨殺された妻と子の号泣を一時なりとも忘れ得たろうか。

しかし、中尊寺を建立して、敵味方、生きとし生けるものすべての成仏を祈願したからには、何としてもこの怨念から解脱せねばならなかった。成仏するということは、来世に仏になることではない。現身の汚濁の心を浄化して、仏心に高めることである。すなわち、おのれの心の中から憎悪と怨念を消し尽くすこと、相手を宥すこと、和解することが成仏であり、安らぎの浄土にいたることなのだ。人間清衡に、それが可能であったか。それが自力で不可能なら、まるごと汚れた心身を預けて金色堂の仏たちの大悲の他力にゆだねるほかなかった。おそらくその両方が必要だったに違いない。怨念を解脱することは、人間にとって最も困難ではあるけれど、人間にとって最も高貴なる営みなのである。

仏教は殺し合いをしない。反戦ではない。非戦である。仏教にとって戦うことは、他人との殺し合いではなく、自らの煩惱・弱さ・憎悪・怨念と戦う営みなのだ。清衡公はこれを身をもって示されたのだった。

清衡公の内面的な格闘の営みと平和選択の決断、そして高貴な祈りを、わたしは揺るぎない誇りをもって現代世界の混沌に提示したい。これこそ二十一世紀の世界に自信をもって提示できる東北の宝、みちのくの無類の精神的遺産だと、私は堅く信じている。



みずか
自ら 其の意を淨うする
こ
是れ諸佛の教なり

「てのひらのエッセー」より

花咲け みちのく 地に実れ

渡 辺 皓 介

『花咲け みちのく 地に実れ』は、平泉中尊寺の千田孝信貫首が、就任十年を記念し、この間に書かれた文章、講演記録を収めた本である。

正直に言って、名利高僧の高遠な法話や文章は、無信心な私の身にそぐわず、敬して遠ざかりたいという思いが強い。

ところがこの本の、とくに講話はユーモアにあふれ平易でありながら、決して「俗」ではなく、深い奥ゆきをもって仏心が語られるのである。

例えば「二本の手」には千手観音のことが話される。沢山の道具を持った手の一本だけ何も持たない手があるという。

仏像を見るのは好きで、方々のお寺やお堂で拝観している。一応手を合わせるが、これは信仰心から跪拝しているわけではない。刻んだ仏師に敬

意を表しているのである。つまり仏像を美術品として鑑賞するのである。信心深い人からは「罰当たりめ」と叱られるかもしれない。

手に持つ沢山の道具は、この世で働く人々を助けるためと思っていたが、何も持たない手を見てはいても、格別に考えたことはなかった。

この手は「やすらぎの手」であり「手当ての手」であるという。手を当てられた病むものは、大きな慰めを得る。「手当て」は実にいい言葉である。この手を「与願の印」というのだそうであるが「与願」もまたいい言葉である。

だが著者は言う。手は文化を創造する。けれども犯罪を犯すこともある。手よりだいじなものがある。それは足である。と。

釈迦は悟りを開いたのち、はだして説法をして回った。仏像が生まれるまで、民衆は釈迦の足を石に刻んで礼拝した。

そうか、それで「万葉集」に仏足石歌があるのか。「万葉集」を読んでも、仏足石歌は短歌としておもしろいものではないので、ほとんどばし

読みをしてきている。この期に読み直そう。こう考えて本を閉じ、棚から「万葉集」をとり出した。

「仏足石歌」は、注釈によれば薬師寺境内に石に刻まれて二十一首がある。その一つ。

釈迦の御足跡(みあと) 石(いわ)に写し置き

行き廻り 敬ひまつり 我が世は終へむ この世は終へむ

短歌より七音多く、三十八音であるのは、誦詠されたためといわれる。

著者はここで仏教詩人坂村真民の詩を引用する。

尊いのは 頭でなく 手でなく 足の裏である 一生人に知られず 一生活たないところと接し 黙々として その努めを果たしてゆく 足の裏が教えるもの しんみんよ 足の裏的な仕事をし 足の裏的な人間になれ

(以下略)

これを読むと宮澤賢治の「雨ニモ負ケズ」の中の「デクノポウトヨバレ ホメラレモセズ クニモサレズ」の詩句がおのずと浮かんでくる。

じつは、坂村真民の全集を架蔵しているのだが、

読んだのは第一巻だけで、あとは棚の奥にしまい込んだままである。

「二本の手」についてだけ書いてしまったが、読まれる方は講演の記録から目を通されるのがよいように思われる。ただ、短い文章であるが、藤原清衡の悲願を論じた「東北の未来への祈り」は是非読み落とさないようにと願う。標題の「花咲け みちのく 地に実れ」は、この一文に由(よ)る、と考えられるからである。

三〇〇頁に及ぶ大冊の精髓を、私は伝教大師の「一隅を照らす これ則ち 国宝なり」の解説と受け止めたが、独断であろうか。

出版祝賀会の席上、瀬戸内寂聴師のメッセージが代読されたが、形式的な祝辞などではなく、共感と敬意に溢れた長文であった。私はそれにも感銘した。

(岩手日日新聞平成十五年十月十三日付「てのひらのエッセー」第二五二回を許可を得て再録した。)

〔能楽対談〕

当地ならではの能も

佐々木 宗生
吉越 研

「中尊寺」の能

吉越 中尊寺能舞台は、この五月、国の重要文化財に指定されましたね。おめでとうございます。

佐々木 ありがとうございます。あの舞台に国の目が届いたということでしょうか、ほっとしています。「中尊寺の能と喜多流古格の舞台を確りと護るように」と十四世六平太先生の、父への遺言でしたからね。

吉越 お父様の佐々木実高先生は、喜多流シテ方であり、また中尊寺のお仕事もされておられたのですね。

佐々木 父は中尊寺執事長を永く致しました。藤原三代のご遺体調査から金色堂解体修理までいろいろと中尊寺の復興に尽くしましたが、中尊寺に伝わる能にも若い時から情熱をもってあたり、職分待遇……玄人として「喜多霞」の紋を許されておりました。

吉越 「中尊寺」の能と佐々木家とのご関係をお話願えますか。

佐々木 中尊寺の能については、仙台藩伊達政宗公の話にはじまります。天正十九年（一五九二）に政宗公が関白豊臣秀次公と中尊寺に参詣していますが、元和四年（一六一八）にも巡拝して、白山神社祭礼に行われている田楽能を以後、猿楽能に改めるように命じたと伝えられています。政宗公は喜多流の一流樹立、流祖北七太夫の運命とも深くかかわったとみられています。大の能好きであるだけでなく、政治的にも能を利用、活用しています。

中尊寺の例でも、それまで一山寺院が離散しバラバラであったのを、僧侶の帰山、復興を計り、



佐々木宗生氏：喜多流シテ方、職分。昭和14年、岩手県中尊寺に生れる。喜多実十五世宗家に師事。昭和21年（6歳）「隅田川」子方で初舞台。「道成寺」「石橋」「翁」等を披演。喜多流自主公演のほか、中尊寺新能、仙台青葉能に出演。日本能楽协会会员。

各院に能の諸役を家職として代々受け継ぐよう、義務づけた。これは人心結束のための策を講じたのでしようね。中尊寺十八坊のうち、円乗院桜本坊はシテ方で、「関山太夫」と称し、父はその十一世ということです。

吉越 お寺全体が神事能一座だったわけですね。

佐々木 一年がかりで能五、六番を仕上げたのでしよう。そして中尊寺鎮守白山神社の祭礼、卯月初午・末の二日間に奉納する。古実「式三番」の延年や、「御一馬」の行列にも種々の芸能がつい

て、大そう賑わったようです。もちろん能の体裁が整うには何十年もかかったはずですが、仙台藩第二代藩主の忠宗公は流儀の二代宗家喜多太夫を召抱えたくらいですから、面・装束類は願出るだけ藩から与えられました。

吉越 今も中尊寺には、著名な面が残されていますね。

佐々木 幕末の嘉永二年（一八四九）正月八日に火災がおき、社殿もろとも、それまでの能舞台が失われました。面も六十二面の焼失記録があります。現在残っているのは「式三番」の古面と、拝領品、火事見舞でしょう。寛永寺春性院徳門奉納のものを合めて、三十面ほどです。吉越さんのお父様（立雄氏）も翁の替え面（二日目の「開口」）や「釣眼」「深井」など興味深く話しておられましたよ。

吉越 中尊寺の能はどのようにして続てきたのでしょうか。お流儀は？

佐々木 流儀はシテ喜多流、ワキ高安、笛一噌、小鼓幸、大鼓葛野、太鼓観世というきまりで、それぞれ藩の専門職（乱舞師といわれた）から稽古をう

けました。シテ方は藩の喜多流乱舞頭である小野家代々から、小野家が絶えてからは仕手連家であった佐藤家ということになりました。私の父はその八世に当る佐藤章先生に師事いたしました。私も中学生の頃まで、毎月中尊寺において下さる佐藤先生のお稽古をいただいたわけです。

一噌庸二師が「中尊寺には、うちと変わらないう手付が残っているので驚いたよ」とおっしゃってましたが、円乗院にも古い型付や伝書、寺や藩の番組など珍しいものがありますので、いずれ整理したいと思います。

吉越 お坊様だけで能ができるというのは凄いですね。

佐々木 中尊寺の読経は声が揃って素晴らしい、僧の立居にも能の良さが出ているのではといわれたりもするそうです。昔は坊さん方もたっぷり暇があつて、稽古に明け暮れたでしょうね。現代では寺も天台宗東北大本山に昇格して、法儀もより高度なことを修めなければなりませんし、観光の面でも発展してますから、大変忙しくなっています。

中尊寺では貫首を山外の余所からお迎えするしきたりなのですけれど、歴代の貫首さまが、中尊寺の能にはとても理解を示されますので、本当に心強く、有難いことです。

吉越 先生はお寺の修行もされたのですか。

佐々木 ええ、得度をして。中学の頃には大人の分まで進んだりしたのですが、父のような二足の草鞋はできないと思いました。たまたま弟がその方に進んでいたものですから、そちらに任せて（笑）。私は能のつながりで、恩返しをさせていただいて——。

吉越 五月の「藤原祭り」は「式三番」と能ですね。

佐々木 ええ、春の「藤原祭り」ができてからは、神事能をこの期間、四日と五日に致します。初日は開口、祝詞、若女、老女と古実舞の「式三番」に始まり、能「竹生島」となります。

吉越 毎年「竹生島」がだされるのは？

佐々木 はい。明治九年のこと、天皇の東北御巡幸の際、この舞台で天覧の「竹生島」をつとめた

のです。その記念に御座所に桜を植え、毎年神事の脇能曲となりました。坊さん方は比叡山で修行して琵琶湖にも想いがあるでしょうから、とても気持良さそうに舞台にたっていますね。

吉越 夏と秋の演能もありますね。

佐々木 秋の「藤原祭り」は十一月一日から三日まで。三日はやはり中尊寺能でしめくくりです。

恒例の能としては八月十四日に「中尊寺薪能」があり、今年二十七回目を迎えました。これは中央の楽師を招聘して、盃蘭盆の行事として催します。

能舞台の特徴

吉越 野外に建つ、同じような形の舞台はほかにありませんが、中尊寺の舞台は光の当り具合がよくて、舞台の奥まで光が入ってきますね。

佐々木 舞台は北北西に面していますので、西日は奥まで射しこみ、面や装束がとても美しく映えて、独特の雰囲気をかもします。

吉越 午後から夕刻にかけての時間帯が、とても

いいですね。

佐々木 五月と九月の晴れた日など、極楽浄土さながらといった状態になります。一日と言わずに、余裕をもって演者に集まっていたら、もし雨だったら「翌日に順延」にしたいですね。

吉越 凄く贅沢ですね。

佐々木 そう、贅沢(笑)。

吉越 舞台の屋根が「茅葺き」というのも珍しいですね。

佐々木 老杉の周囲に溶けこむ様でとてもいいでしょう。藤島亥治郎先生(平泉名誉町民、建築考古学)は、もう少し薄く葺けるとスッキリした形になるとのお話でした。私も同感です。「茅葺き」といっても、現在では「葦」だけで葺いていますから、「茅」よりはよほど長持ちします。

吉越 ほかに特徴といえますと？

佐々木 橋掛りの角度が舞台に対して深いことでしょうか。一二〇度あるそうです。一ノ松からワキへアシラウ時も距離感があって絶妙です。私が「道成寺」を勤めたときも、橋掛りから鐘を見上

げると自分の正面にドンという感じで迫り、こちらも気合が入りました。

吉越 舞台の名称、歴史についてはいかがでしょうか。

佐々木 いままでは、寺では「能楽堂」、神社では「能楽殿」、古くは「能殿」などといういろいろに言われてきました。このたびの重文指定を機に、「白山神社能舞台」と指定書に従った名称に統一されるようです。

舞台は嘉永六年（一八五三）に再建されました。ペリーの浦賀来航の年、維新の十五年前ですから、仙台藩としても経済の逼迫した頃でしょうが、白山神社は藩主伊達家の鎮守でもありましたから、どうしても能舞台は再建しなければいけないわけです。大工の棟梁は経済など意にせず工事を進めたのでしよう、未完成のまま工事打止めとなっています。鏡板に松も描かれず、楽屋天井も貼られませんでした。九十四年後の昭和二十二年、喜多宗家による奉讃式能のとき、松野奏風先生が円乗院庭上の松を写して、鏡の松を描かれたのです。

「道成寺」の滑車・金具は昭和五十七年に父の「七回忌追善能」で私が「道成寺」を披く時につけました。

吉越 舞台の下には、音響のための壺も入れてあるのでしようね。

佐々木 それが入っていないんですね。以前、探したのですが、発見できませんでした。

吉越 それにしては足拍子が響きますね。戦後、松野奏風さんがお描きになられた鏡板の老松は、だいぶ落はくしていますが。

佐々木 それを松野秀世さんが気になさって、近々、手を入れたいとおっしゃっていたのですが……

吉越 でも、歴史を物語っていますから、鏡板はあのまま手を入れない方がいいようにも思いますね。舞台と鏡ノ間は茅葺きですが、橋掛りだけは茅葺きではありませんね。

佐々木 元は栗の薄板で葺く「木端葺き」でしたが、今は別の素材です。

吉越 舞台の上方に葺戸がありますが。

佐々木 舞台の周囲や橋掛りには溝が彫られていて、大正の中頃までは雨戸が閉められていたのですが、今はありません。

吉越 国の重要文化財になって、以前と変わったことはありますか。維持・管理面は、大きな問題はないのでしょうか。

佐々木 従来通りです。所有は白山神社ですが、維持・管理は中尊寺も加わる形で運営します。先日の『薪能』の「篝火」もそうですが、火の取り扱いは厳しいですね。屋根が茅葺きですしね。大



吉越 研氏：能楽写真家。日本写真家協会会員。昭和32年東京生まれ。父吉越立雄に師事。NHK「日本の伝統芸能」能狂言部門写真・小学館『謡曲集』などに写真を発表。横浜かも「薪能」写真展・延岡市での幽玄の世界「薪能」写真展・横濱市都筑区で「薪能」写真展・新宿御苑アートギャラリーで4人展。主な著書に小学館『能・狂言鑑賞ガイド』。

鼓の革を焙じるためには楽屋で炭火を使いますが、一番危険なのがタバコの火です。

吉越 佐渡にはたくさんさんの舞台がありますが、周囲を戸板で閉められている所も多く、中が見えなくて、がっかりした場所もあります。

佐々木 そう。皆さんは全体を見たいのしょうからね。参拝の方も佇んで御覧になっていかれることが多いですよ。でも、勝手に舞台上に上がってしまうのは困りますね。

吉越 エッ、舞台の上ですか。

佐々木 ごく稀ですが、人目のない時に舞台の上で記念写真を撮ったりして……。それで宮司さんが舞台の周囲に柵を作り、舞台上にも正面と脇正面に勾欄を置くようになりました。

吉越 階（きさはし）があるからでしょうかね。

佐々木 いえ、階は演能のときだけで、普段は外にしています。階をつけたままですと、もっと上がられてしまうでしょう。中尊寺の能楽堂も、そのまま普段の外観で見られると喜ばれますけれども、建物の維持・管理から言いますと、本当は、

戸などの囲いをするのが良いと思います。謡会で能舞台を使われる時などは、楽屋の準備などは地元の私の会（喜桜会）がお世話をしているのです。お素人が舞台を使われるときも、行儀よく使って下さらないと困りますね。

吉越 通常の時の舞台の手入れは、どうなさっておられるのですか。

佐々木 普段から中尊寺に頼んで拭いてもらっています。汚れていると土足で上がってしまうのですよ。綺麗にしておけば、「土足厳禁」だと思いますね（笑）。

これからの企画

吉越 今後の企画やご予定は、いかがですか。

佐々木 東北地方で実現したい催し……企画もあります。一つは、喜多流にない曲ですが、「実方」……これは宮城県の名取という地が舞台になった曲ですし、「護法」もそうですね。こういう曲は他流の方に来ていただいで、この地の能として上



第25回中尊寺新能「八島」佐々木宗生
平成13年8月14日

演できればと思います。

吉越 他流で復曲したものは、喜多流では上演できないのですか。

佐々木 いえ、やりませんかというお勧めもいただいでおりますから、できない事ではありません。

そのほか、仙治藩にだけあったという「摺上^{すりあげ}」は私が復曲しまして、平成元年に『仙台新能』でいたしました。それ以外に、まだ復曲していませんが「宮城野」という曲もあります。詞章がとてもすぐれています、喜多実先生も土岐善麿先生も復曲したいと言われたそうです。三原良吉氏が『仙台藩能楽史』の中で、「仙台には『宮城野』という喜多流の本がある」と書かれておられるのですが……。以前から探しているのですけれども、いまだに見つけられないのですよ。どうしても見つかれば、今ある資料で上演したいと考えています。

吉越 詞章はあるのですか。

佐々木 活字として残っています。この「宮城野」「実方」「護法」の三曲と平泉藤原三代の滅亡を題材にした「錦戸」という曲が観世・宝生流にありますね。泰衡たち兄弟が、頼朝につくかどうかで争って滅亡しているので、平泉では上演しにくい面もあるのですが（笑）、中尊寺の舞台で供養として上演できるのならばと思うんです。あとは、

私はまだ拝見していないのですが、宮沢賢治の作品を能にした「永訣の朝」。

吉越 ああ、青木道喜師の作品ですね。

佐々木 狂言の「鹿踊りのはじまり」もですね。

吉越 はい。これらは中尊寺でなくても、宮沢賢治の花巻とか「現代詩歌文学館」のある北上市も有望です。上演されるといいですね。

佐々木 中尊寺能楽堂には、いろいろな話が持ち込まれますが、観光、興行的な視野から持ってくるのと、どうしても問題が出できます。中尊寺で演じなければならぬといった内容や、結びつきがないと難しいのです。

吉越 できないものは、お断りになるのですね。

佐々木 ええ。歌舞伎で「俊寛」をしたいたとか、「勸進帳」をといた話もありましたが、何も能楽堂でやる必要はないですね。平泉という土地でしたいのであれば、別の場所を探せばいい。あの舞台でやられると、それが皆さんの意識の中に残ってしまう。

吉越 能舞台なのですから、やはり「能」を、と

考えておられるのですね。

佐々木 そうです。以前、外国の有名なフィルの何人かのメンバーを迎えて「この能舞台で演奏会をさせたい」という話を持ち込まれたのですが、この時、問題になったのは、舞台上に靴を履いたまま上がるということでした。舞台上に板を敷こうが、毛氈を敷こうが、靴で上がる姿を見ると、能舞台の神聖さが消えてしまいます。能で沓が出るのは「張良」だけですよね^(笑)。履いてきた靴下のまま舞台上上がったたり、柱を素手で触ると油がついて後でシミになり、なかなか取れません。内弟子修業中には床拭きもしていましたから、汚れに対して敏感になっているのです。私は「皮靴はお断り」と言っ、フェルト製の履物なら、という案を出したのですが……。

吉越 演奏はしたのですか。

佐々木 私は東京で例会能がありましたから立ち合えませんでした、五〇〇人ほどの観客で行ったそうです。でも、気の毒に強風のために譜面がめくれてしまい、演奏が何度も中断したそうです。

もうこりこり、と企画者が言っていたと聞きました。

吉越 駅に「町を世界遺産に」という横断幕が張られていましたか——。

佐々木 数年先を目標に、「平泉を世界文化遺産に登録」という運動です。「世界遺産」をめざして、景観とかまちづくり、生活すべてに配慮しようということ、文化をどのように受け継ぐのか、心が大切とされます。能舞台の重文指定も、平泉の文化の流れの中にとらえ、この運動のはずみになっていきます。

吉越 ご当地の能の上演が実現するのを期待したいと思います。本日は、お忙しいところをありがとうございました。

能楽タイムズ・第619号より転載

ひらく

千葉 万美子

この春、岩手日報社から「平泉文化」について書かないかと誘われた。角川書店が出す『奥の細道を歩く』という雑誌の広告ページを奥の細道ゆかりの新聞社十二社が紙面を交換して作るのだという。

平泉文化にはうとい。だが、私が稽古している謡や仕舞、能楽との関わりから平泉を語ることにできるかもしれない、と引き受けた。

まず最初に心に浮んだのは平成十三年に「じょうみだれ猩猩乱」を初演された佐々木多門師の舞台と、その三年前の夏、八百年の眠りから覚めて開花した古代ハスの姿だった。どちらも端正で美しく、しかも堂々としていた。能では重要な曲を初めて演じることを「ひら披く」という。中尊寺で多門師も披いたし、ハスの花も開いた。どちらも「ひらいて」

いる偶然に驚き、興奮した。これで書けるかもしれない。

「猩猩乱」は能楽師が精進の過程で通る第一関門である。

その夜の舞台、多門師が登場して最初のシテ謡にまず驚かされた。

いつもはご自身の姿にも似て端正に謡われる師の声が太くひび割れてさえ聞こえた。

人と行儀のよい距離を取っているかのような能をこの夜は捨て、ぐいと一步も二歩も見所、けんしょ観客に歩み寄っての謡と感しられ心が震えた。伝えたいことはすべて必ず伝える、という気迫に溢れていた。

気迫は当然舞にももっており、すつくと片足で立つ型では勢いが余って軸足がぶれるところも見られた。が、だからこそ良かったと思われる。力を制御して、内々に小さく舞うことを拒んだ結果であろう。

後日、この感動を伝えたとき、多門師ははにかみながら、「乱」で得た技術は次の何か別の曲に

繋がるものではなく、当日どう舞ったか以上にこの曲にどう向かってきたか、むしろ過程が大切な曲である、とおっしゃった。

「抜くとき」以上に「抜くまで」が大切なのだ、と。

「中尊寺ハス」もまた、恵泉女学園園芸短期大
学教授の長島時子先生の五年の丹精によりようやく
開花したものである。種を水に入れ、葉が四枚
になったところで土に植え替える。肥料負けしな
いように、肥料を施さないとこから始まって、
蓮根が大きくなれば大きい鉢に移すという作業を
繰り返す。

ハスの花が咲く条件は肥料が適量、日当たりが
十分、水が温かいの三つだそうだが、このような
「開くまで」の心配りがなくては、もちろん「開
くとき」は訪れない。

さて、平泉で多門師や古代ハスが「ひらいた」
ように、芭蕉も「ひらいた」だろうか、芭蕉ほど
の人だ。もちろん、「ひらいた」に決まっている。
それは「五月雨の降残してや光堂」という句だ

ろうか。「夏草や兵どもが夢の跡」だろうか。そ
れとも「奥の細道」という文学史の上で語らぬわ
けにはいかなない大きな作品全体のことだろうか。

それらも当然芭蕉が開かせた花に違いないが、
そんな一句一句ではなく、ああして歩いた日々こ
そ「ひらき」ではないか。また、歩こうと発心し
たときすでに「ひらいて」いるのではないか。

そのとき、寺報『関山』の「爾時」という貫首
さまの文章を思い出した。

「爾時」についての説明をこのような冊子に私
などが書くのは文字通り「釈迦に説法」というも
のだが、貫首さまの御文章から引かせていただく
と、爾時とは「爾の時」という意味だが、単なる
接続詞の「その時」ではない。お釈迦さまの説法
の地、靈鷲山りょうじゆせんで菩薩、阿羅漢あらかんの顔触れが揃い、大
衆の心も満ちわたり、時も熟し、聴聞の行儀が整
った時が「爾の時」で世尊が三昧からお起ちにな
り、無上甚深微妙むじょうじんしんみまうの法が今まさに説かれるその時
が「爾時」だという。が、つまり、どの時もおろ
そかにしてよい時はなく、一瞬一瞬が「爾時」と

いうことだろう。

芭蕉は旅のすべて、人生のすべてが「爾時」であることを先刻承知で、平泉までを歩き、平泉であとにしたのは間違いない、と私は自分の文章の最後をそう締め括った。

多門師の能を「披く」ことで得られた深い思い、中尊寺ハスの開花、そして貫首さまのお言葉、この三つとの出会いがなければ書けなかった文章である。

おかげで、この時の文章は私の書いたものの中で最も上品で静かなものとなった。

了

「爾時」は『花咲けみちのく地に実れ』の一
一ページに収録されています。

(エッセイスト・関市在住)



中尊寺新能「猩々乱」佐々木多門師

〔近江秋日〕

水辺空間と歴史的風土

佐々木 邦世

瀬田の夕照

久しぶりに琵琶湖の畔をゆっくり歩いた。きれいに舗装整備された遊歩道は水辺に沿って緩やかにカーブしている。「快適な」景観が造成され、犬を連れてその快適さを満喫しているかに見える女性にも再々行き交った。

しかし眼前の景とは別に、この琵琶湖に係って私のなかで意識しているひとつがふたりいた。ひとりは動物行動学の視点からエコロジー（生物と環境）について著かれています。日高敏隆氏（元滋賀県立大学学長）であり、もうひとりは、作家の横光利一である。

横光は、小学校時代に三井寺の近くに住んでいて、土地のひとつも知らないような間道まで、大津の疎水から三井寺のあたりは足で歩いて熟知していたようだ。

月刊誌『波』（新潮社）に長期連載されている日高敏隆氏の随想を、数年来関心をもって読んできた。読みながら、わたくしも自然環境の問題に関心をもつようになったともいえる。そして三年前、この大津のホテルで「全国観光土産品公正取引協議会」滋賀大会が開催されたとき、日高氏の記念講演があるのを知って、個人的に参加し聴講した。いってみれば、バブル時代には自然環境を壊してきた側の、観光業界の総会に踏み込んで講演する、ということに意義を感じたからでもある。むろん、主催地の滋賀県立大学学長という立場からでもあったろうが、それ以上に琵琶湖の水質汚染という負のインパクトを脱して、クリーンな観光環境のイメージをつくりあげようとしている近江の人と業界の意識というか、気概のようなものさえ感じられたからであった。

*

しかし今回、その琵琶湖の石組み堰堤や水辺の歩道を歩きながら、あらためて考えさせられたのは日高氏のつぎのような指摘である。

自然にやさしく、自然と人間の共生とかいう、今日よ

く目にするこゝが、何を意味しているのか。自然にやさしく、というが、自然は闘争と競争の場である。

人里を創ろうというのは、いかにも人里らしい人里を作ろうということではない。人里らしい人里などというものは人里ではない。それは人間のロジックを押し通し、自然のロジックを押しつぶしたコンクリート張りの川と同じく、要するに人工物にすぎない。近ごろは親水公園づくりとか森づくりが流行している。しかしそれらはいずれも、よく管理された人口庭園（公園）であって、人が求めている心の安らぎや喜びを与えてくれるものではない。

きちんと管理された庭園や公園は、いかにそれが自然らしく見えようと、けっして現実の人里ではなく、従って自然と共生するものではないからである……。

かつて草柳大蔵氏も、地方都市にできたテーマ・パークなどの中を歩くと、要するに、セメントとガラスの石油化学製品の集合体であることがわかる、と言っていた。それにも通じることかもしれない。

そして、心配されるのはやはり「平泉」のことである。

*

〈平泉町都市計画マスタープラン〉というものが策定され、この四月に概要版が配布された。その中の「整備構想図」のページに図示されていた「水辺プラザ」なるものが、一体どのような河岸整備を構想しているものか危懼された。どうも、環境保存とか生態系に比較的関心のあるひとでさえ、「水辺プラザ」といった造語に自然に繁茂する叢や、柳などの河畔樹相を予想し、そうなるものと思ひ込んでいるのではないか。

しかし、そのパンフレットの裏面には当該地に青色を塗って「広域交流ゾーン」と記示してある。到底、「夏草」の生い茂った平泉の原風景とは異質な、まさに管理された疑似自然の空間になろう。平泉にそぐわないなどと後になって歎いても通らない。プラザとは、本もとそういう意味だからである。町で策定した案より1kmも下流であれば、祇園八坂神社の正方にあたり、祇園がそもそも河川に出る道筋、水辺にかかわったことに鑑みて、言うなればそれはそれで検討してもいいということになろう。が、そうした

風土の意味を聴こうともしない行政の体質だからこまる。

残照の時刻、瀬田の辺りからふり返ると、想った方角に比良の山系が見えない。湖岸線に沿って歩いているうちに、方向感覚が大分ずれていた。「…真水を抱きまきてもれる昏き器を近江と言へり」と、河野裕子がそう詠んだのは、まさに近江の風土である。

三井寺（園城寺）の道

「五十四年ぶり総本山園城寺に里帰り」（中外日報）の見出し記事で、三井寺宝物展のことは知っていた。中でも千手観音像（平安・重文）は、京都如意ヶ岳にあった園城寺別院の如意寺の本尊だったという。昭和二十四年から、奈良博などに寄託されていた。

この機会に是非、直に拝みたくて、翌朝、三井寺に参じた。ここも、中尊寺の歴史に深い因縁のあるところである。本堂の内陣、特に仕切った障子明りのなかで、千手像に謔かに対峙した。ムクの一木から彫りあげられた、まことに重量感があってしっかりした像容である。それは、仏像

彫刻としてだけでなく、拝むこちらが、差し出された御手に、その慈悲の姿に信を抱くことができる頼もしきである。

*

この三井寺の土地について、横光利一の紀行文「琵琶湖」の記述も、前から気になっていた。

友人の永井龍男君が初めて関西へ来て、奈良京都大阪と廻つたことがあつた。…けれども、人の云ふほどにはどこも感心出来なかつたが、ただ一ヶ所近江の坂本といふ所が好きであつたといふ。…坂本で感心をするなら大津の疎水から三井寺へ行くべきであると私は云つたのだが、奥の院の夏の土の色の美しさと静けさは、あまり人々の知らないことだと思ふ。あそこの土の色の美しさには、むかしの都の色が残つてゐる。すべて一度前に、極度に繁栄した土地には、どことなく人の足で踏み馴らされた脂肪のやうな、なごやかな色が漂つてゐるものだが、私の見た土では、神奈川の金澤とか鎌倉とかには、衰へ切つてしまつてゐるとはいへ、幕府のあつた殷盛な表情が、石垣や樹の切株や、道路の平坦な自然さに今も明瞭に現れてゐる。東北では松島瑞巖寺、それから岩手

の平泉。これらはみな大津の奥の院の土の色と似たところがある。
〔全集〕・河出書房新社／第十三巻

これは、昭和十年八月に発表されたものである。横光は、この前年の九月二十一日に盛岡市で開催された文藝春秋社主催の講演会に来県している。その際、菊池寛も吉川英治も、小島政二郎・子母澤寛も中尊寺を訪れている。横光の揮毫だけ遺っていないが、この記述からして中尊寺の境内を逍遙したに違いない。

横光の、この視点は、まさに和辻哲郎が『風土』にいう「歴史は風土的歴史であり、風土は歴史的風土」であることを謂い得たものであろう。
そして、次のようにも叙べている。

この奥の院をなほ奥深くどこまでも行くと、京都へ脱ける間道のあるのは、ほとんど土地の人さへ知らないことだが、ここをほじくれば、一層珍しいさまさまなところがあるに相違ないと私は思つてゐる。

と。この指摘は、何をどこまで予知していたものであったろうか。多分、作家らしい漠とした感のようなものだった

ろうと想像されるが、そこがなんとも気になるのである。あるいは、いまだ所在の定かでない「如意寺」の幻影でも見ていたのであろうか。とすれば、実に鋭い。

平泉寺院は「園城寺の法を伝えた」と鎌倉時代の公文書にもある。法脈のみならず人脈もつながってくるかも知れない。その園城寺の近く、滋賀と京都を結ぶ尾根づたいの古道「如意越え」は、数年来抱いている関心事である。

*

昼近く三井寺を辞し、堅田かたなを廻って琵琶湖大橋から佐川美術館に向かった。明年の秋、こちらで「中尊寺と義経・弁慶展」(仮称)が企画されているので、前もって施設を見ておくことにした。

「どうです。琵琶湖すっかりきれいになりましたやろ。もっとも、きれいにし過ぎだって——今年春の、世界水フォーラムで外国からみえた偉いさん方から、いわれてしまいましたんや」

タクシーに乗るとすぐ、運転手さんが軽く語った。

(執事長)

平泉を訪ねて

峰 覺 雄

今年、約二十年ぶりに、中尊寺に参拝する機会を得た。平成十二年、折りしも中尊寺開山一一五〇年記念特別展が企画され、私どもの「竹生島経」も出展させていただいた。ご当山「国宝・紺紙金字一切経」を始めとして、国内諸山に遺る数々の装飾経とともに公開していただいたこともあって、私にとって今回の参拝は、喜び深いものとなった。

東北平泉の地は、我々関西の地からは大変に遠地であり、また〈東北〉という地域の風土（匂い）には、京や関西のそれとは大きく違うところがあるようにいつも感じる。わたしは、今回中尊寺を訪れるに当たり、この東北の地がもっている、匂いに触れることを更なる楽しみにして、平泉へ向かった。

― 老杉 ―

月見坂から参道を登って来ると、そこに立ちそびえる杉の巨木にまずは圧倒される。「老杉」とお聞きして、なるほど、ぴったりの呼称であると感心させられた。そこに宿る聖気、その凜とした空気が、まさにここは霊地である。しかも、「北国の霊地」である。老杉を見てみると、東北地方というこの北の地の自然の厳しさが感じられる。長年の風雪に耐え忍んで、今なお、強くまっすぐに立ちそびえる「老杉」。自らに厳しく、飾ることをしない。堅実を旨とし、驕ることをしない。東北の人々の気質をそこに感じた。

余談になるが、過去何度か此処を訪れさせて頂いているが、偶然にも、何故かいつも雨になる。しかし、そば降る雨、霧に煙ぶる「老杉」に、妙にこのことが納得できてしまうのである。

― 金色堂 ―

「中尊寺」といえば「金色堂」である。そのお堂を見た者の心を一瞬にして捉えて離さない。屋

根の垂木一本までに至る黄金の輝きはもちろんのこと、そこに施された盛り上げの漆蒔絵、精巧な螺鈿細工と幾多の裝飾が光り輝き、そして重なり合い、交差し合うまさに光の美術の粹である。気品のある本尊阿弥陀如来を始めとする平安の尊仏に導かれ、「これぞ極楽浄土ぞ」と、素直に感慨にひたることができる。

同じ極楽浄土をイメージして作られたと言われる「金閣寺」とは、随分雰囲気が違う。「金閣寺」のそれは広い庭園の中にあつて、柔らかな太陽の光を受け輝き、華やいだ雰囲気が強いが、「金色堂」はそれとは少し違うように思う。それは、決して鞘堂さやどうに納められているからではない。芭蕉の句ではないが、老杉に囲まれてたえず金色堂の姿を思うとき、余計にそう思えるのである。

金箔を始めその眩まばゆいばかりの裝飾は、金閣寺のそれ以上といつてもいいが、なぜか落ち着いて（シックに）感じる。ただの華やかさとは違う、心の奥底に語りかけてくるこの感動、これはその建立の背景から来るものなのかもしれない。

― 京文化と東北文化 ―

奥州平泉文化とは、京文化の飽く無き移植であるといわれる。遠く離れ、当時まだ未開の地であったこの東北平泉の地に、京の美術・学問・生活などを完全に模倣して写し取り、この地で花開かせたのである――と。そのことばかりがクローズアップされてきた。実際、当時この未開の蝦夷の地に、京の最新の専門職人から、知識僧・文官人・交易商人といった人々が来たり、新しい風、文化の風が吹き込まれ、京の風習がもたらされたのかも知れない。

しかし、金色堂をはじめ、中尊寺の建物を眼前にすると、ただ雅の追求・ただ京文化の移植、それだけではないことを私は感じずにいられない。それは、京文化と東北文化の融合、そして昇華、その上に成立しているのが平泉文化ではないかと自分は解釈をしている。黄金に輝くお堂、大変に華やかながら、何故か、厳しさとか物悲しさといったものも感じる。苦難のそれまでの奥州藤原氏の歴史の匂いがそこには感じられるのである。

『中尊寺建立供養願文』の中にその意図を、第一に官軍・蝦夷の区別無く、むなしく戦死した古来幾多の冤霊を弔うため。第二に辺境蛮地に仏教文化を開かんがため。第三に戦乱や災害の無い安寧な世を祈願するため、と掲げられているところからもそれは理解できる。

まだまだ未開の地。群雄割拠。勢力争いから、あちらこちらで戦乱が続き、多くの命が落とされていく。さらに自然厳しき東北の地。人々の生活も容易ではなく、生きることさえままならない。そんな東北の民の悲しみや祈りが、「中尊寺」にはあるのである。千田孝信御實首のお言葉として、本に「平泉に黄金の榮耀だけを見るのは浅い。栄光の陰には千載に渡って語り継がれる世の悲しみがある。境内の一木一草のたたずまいからこのことを感じ取ってほしい」とあった。

まさに、当時の人々が手を合わせ願った極楽浄土の希望の光、それが、金色堂の輝きであり、中尊寺の姿なのであろう。

金色堂からの帰り道、同じく東北の心を感じる

建物にめぐり合うことができた。木立の中に埋もれるように佇み、今まで気が付かなかった「白山神社能舞台」である。ドイツ人建築家ブルーノ・タウト氏、イギリス人の陶芸家バーナード・リーチ氏が絶賛された建物と説明を受けた。屋根は茅葺き、派手さのない、いかにも雪国を感じさせる作りが一層素朴で暖かみを感じさせてくれる。この能舞台において、毎年、一山僧侶による能が奉納勤仕されるとのこと、そして、五月には必ず「竹生島」が演じられると聞いた。比叡山に修行をした僧が、びわ湖を思い出して演じてきたと聞き、その昔、竹生島も比叡山の末寺であった時代もあり、この御寺を急に身近に感じて、喜び一人の訪問となった。

(竹生島宝蔵寺管主)

白山神社能舞台の重文指定に寄せて

北嶺 澄照

はじめに

本年四月十八日、国の文化審議会文化財分科会は白山神社能舞台を重要文化財に指定するよう文部科学大臣に答申、五月三十日の官報告示により正式に指定された。

今回の指定では兵庫県篠山市の春日神社能舞台も重文に指定されている。これは「能楽」が平成十三年五月に世界無形遺産に指定されたことと関連があるかとも想像される。また「平泉の文化遺産」の世界遺産登録に弾みをつける喜ばしいできごとであった。

ここでは重文指定と再建百五十年という記念すべき年あたり、白山神社能舞台に関わることがらを筆者のできる範囲内でご紹介することとしたい。

白山神社、神事祭礼と能舞台の概要

白山神社の創建に関しては詳らかではないが『吾妻鏡』

文治五年（一一八九）九月十七日条「寺塔已下注文」の尊寺の記載に「（前略）鎮守は、即ち南方に日吉社を崇敬し、北方に白山を勧請す（後略）」とあり、平安時代の末には存在していたことが知られる。中尊寺に伝わる中世の史料にも関連の記載を見ることが出来る。また白山神社の別当職については、天正十五年（一五八九）の白山社殿再興造営棟札に「別当小舞澤頼意」と記されており、以来明治に至るまで山内の法泉院小前沢坊（史料には小舞澤、小舞澤坊、法泉坊、法泉院とも記されている）が相続してきたことは多くの近世史料により裏付けられるところである。なお明治の神仏分離により、白山神社は分離され、現在は神社本庁に属する宗教学法人白山神社となっている。

江戸時代の記録によると、白山神社の神事祭礼は卯月（陰暦四月）初午の日とその翌日に行われていた。初日は朝八時に社殿の扉が開かれて法要が営まれ、正午から祭礼が始まる。その次第は、社前の広場と金堂前で獅子舞を奉納、次に御一馬の行列が社頭に向かう。次いで舞台（史料には「長床」と記されている）で神楽・ロマイ・田楽・古式三番が納められ、最後に能三番が奉納される。二日目

は、長床でロマイを納め、それから山内を巡り、定められた諸堂に法楽・ロマイ・田楽を納め、長床へ戻り田楽・式三番・能三番を勤めるといふものであった。その記述からは中尊寺の年中行事の中でも非常に重要な位置を占めていたことがうかがわれる。



現在は絶えて伝わらない御一馬の行列
（「中尊寺祭礼古図」より）

現在は五月四、五日に白山神社祭礼が執行されている。初日は神社による献膳行列が行われ、次いで社殿での祭儀、氏子による能舞台での獅子舞奉納があり、それらが終わると能舞台で寺による法楽、古実式三番、能一番が納められ、翌日は式三番の内「開口」と能一番（さらに狂言一番が加わることもある）が奉納されている。古実式三番は昭和五十年（一九七五）に国の「記録作成等の措置を講ずべき無形の民俗文化財」に選択されている。

祭礼で行われる能楽は神前に奉納されるもので特に「御神事能」と称され、江戸時代から現在まで絶えることなく受け継がれてきた。シテ・ワキ・囃子・狂言方という諸役を寺の僧侶が稽古して勤めることが大きな特色で、これは全国でも唯一のことかと思われる。

能舞台は前身の施設である長床が嘉永二年（一八四九）に火災で焼失した後、嘉永六年（一八五三）に再建されたものである。白山神社社殿の南に位置し、舞台及び楽屋は入母屋造、茅葺の東西に長い建物となっている。この北面に金属板葺の橋掛がつき、北東方向に延びて茅葺の鏡の間に接続している。鏡板の松は再建時には描かれず、再建から九

十四年を経た昭和二十二年（一九四七）、能画家である松野奏風画伯が彩管を揮ふるわれたもので、当初の鏡板を裏返しにして描かれている。

知っておきたいこと

白山神社能舞台重文指定に際しての文化庁の見解を『月刊文化財』七月号「新指定の文化財（建造物）」から引用してみる。

（前略）

白山神社能舞台は、正統的かつ本格的な規模と形式の舞台をはじめ、橋掛、鏡の間、楽屋からなり、意匠や機能上の工夫にも独自性が認められ、価値が高い。また、完備した構成の近世能舞台遺構としては東日本で唯一といえ、古刹の中尊寺山内において近世より連綿と続く芸能の場として、我が国の芸能史を考えるうえで貴重な遺構である。

重文指定に至るまでは担当調査官による現地調査や専門部会での審議などいくつかの段階を経て正式指定となる。

中尊寺からも関係資料を数度にわたって提出した。その過

程で感じたことは、地域の人たちにとって大事な文化遺産、すなわち歴史的建造物、祈りや祭りの場、民俗風習を伝える道具をはじめとするさまざまなものは、その土地の人が「誇り」をもって、大切に後世に伝えようとしなければ残らないのだなということである。国の指定文化財だから市区町村・都道府県・国が「何でもわかってきている」、「どんなことでもやってくれる」などと思わずに、身近に接している地域の人間がその価値を十分認識し、先人たちの遺してくれたものを後世に伝える努力をしなければならぬのだと。

そこで、白山神社能舞台について、価値判断の根拠として今後たびたび引用されるに違いない先賢の貴重な証言をここに記録しておくこととする。

まず、ドイツ人建築家ブルーノ・タウト氏はその日記『日本 日記一九三四年』の一節に、金色堂を拝観して、

金色堂は覆堂に被われ、あたかも胡桃の殻に包まれた核の観がある。——実に驚異に値する建築だ。以前は覆堂が無かったから漆地金箔押しの外観がさながらに見られたわけである。堂の四壁の様式はきわめて蔽

格で驚くばかりだ。(略)善美を尽くした内部の荘厳はビザンチン或はロマン建築を偲ばせる。内陣の柱には青銅鍍金の箍たぶをはめ、金地に螺鈿らでんの荘嚴を施し、(略)建築のダイヤモンドとして尊重に値するものだ。と記し、能舞台について次のように記した。

林の中の能舞台に通ずる道の傍に小さな神社があった。能舞台はいかにも洗練された構造で、実に簡素きわまりなき建物だ。試みに舞台の上に登って足踏みすると、踏み方に応じてさまざまな音色が出る。この田舎風の典雅な建築物は、中尊寺で最も強い印象を与えるものである、——これもまた独創的な日本だ。タウト氏は日本各地を訪れて伝統的な建築に親しみ、桂離宮や白川郷の合掌造を広く紹介し日本人に再認識させた人物で、中尊寺を訪れたのは昭和九年(一九三四)のことである。

次に文芸評論家、亀井勝一郎氏の紀行文がある。『芸術新潮』昭和二十五年(一九五〇)五月号に掲載された「中尊寺」で(後に亀井氏の全集第九巻にも収録されている)、その中で藤原三代の歴史や美術を述べた後に、こう記して

いる。

金色堂の北一丁、関山の西北端に、嘉永六年(江戸末期)に造営された白山神社とその能舞台がある。写経について関心したのは、能舞台であった。野外にあるので明るく開放的だ。堅牢けんろうで豪壮なすがたも実にいゝが、位置がまたすばらしい。この位置と方角を選んだ人は詩人にちがひない。見物席などはまるで無視してゐる。舞台正面に立つと、眼下断崖かまたの彼方、衣川の古戦場が一望のもとに眺められるのだ。私が能楽師なら一生に一度こゝで舞ふことを望むだろう。

歴史と日本人の実態を探求した亀井氏がこのように述懐しているのである。

このほかにも知っておきたい文章が三つある。一部引用や抜粋ではなく、全文を読んでいただくために「再録」という形でこの寺報に掲載しているのでそちらも是非ご覧いただきたい。

白山神社能舞台は、多くの人から称賛される。演者の側から指摘されるところは、舞台と橋掛の角度についてで、ワキ柱からシテ柱を通して幕口の柱と一直線になる。時間

的、空間的な距離感があって古風にして正當なものと同好まれる所以でもある。見る側からは、茅葺の屋根、歳月に洗ゆえんい流されたような素木しらぎの美しい舞台が、周囲の木立と相俟まって趣を増して好い、といわれている。

能舞台に関しての知っておきたいマナーをひとつだけ。

舞台、橋掛に出るときは必ず足袋を履くこと。この場合は神聖な空間としてとらえられている。能の役者は白足袋、狂言方は卵色の足袋となっている。謡や仕舞の稽古をしていれば当然知っていることだが、たとえ見学、視察や調査といった場合であっても舞台や橋掛りに出る時は靴下から足袋に履き替える心がけが必要であろう。

おわりに

寺社やそれに付属する芸能は、それぞれが単独で成り立っているのではない。地域の人びとの信仰心、思いによって何百年と続いてきているものだ。白山神社と能舞台、そして中尊寺もそのように支えられ、護られてきたのだろう。能舞台を、将来にわたって活かしながら永く伝えていく

ためには、白山神社の所有者としての責任感と共に、中尊寺一山においては御神事を勤めてきた伝統への自覚をこの機会に新たにし、地元である坂下・桜川地区の方々、能楽愛好団体である平泉喜桜会と心を合わせて護持に努めていかなければならない、と強く感じた次第である。

(管財部執事)

参考文献

- 『中尊寺白山社の沿革と能舞台について』
平泉町教育委員会、昭和五十一年（一九七六）
- 『中尊寺史稿』
中尊寺、昭和五十八年（一九八三）
- 『平泉町史』史料編一
平泉町史編纂委員会、昭和六十年（一九八五）
- 『平泉 中尊寺毛越寺の全容』藤島亥次郎監修
川嶋印刷(株)、昭和五十五年（一九八五）
- 『能楽ハンドブック』三省堂、平成五年（一九九三）
- 月刊『文化財』七月号（四七八号）文化庁文化財部監修
第一法規(株)、平成十五年（二〇〇三）
- 『きぬどめ』第四七号
関山会、平成十五年（二〇〇三）



御神事能の番組記録（江戸時代末期・山内円乗院蔵）



能舞台に関する記録（江戸時代末期・中尊寺蔵）
右側は、嘉永二年の能舞台焼失が詳しく記録されている。

中尊寺の能

津 田 左右吉

中尊寺の能といふことは話には聞いてゐるが、見たのは去年の春がはじめてである。臨時にしつらはれた野天の棧敷に坐つてゐると、常設のうすぐらい棧敷で能を見るのとは氣分が違ふ。幾株かの老松が高く聳えて午後日光をさへぎつてはるるが、全體の空氣は明るい。舞臺はふるびてゐるせいもあつてか、まはりよりもやゝ暗い感じがするが、今としの演奏の時には、木の間をまれて來る日光が「竹生島」の辨天の衣裳や龍神の赤がしらををり／＼照して、その美しさを一段と添へた。見物の老若男女が、木の根に腰かけたり草むらの中にたつたりして、がや／＼としてゐるのもおもしろい。とき／＼風がふくと、棧敷の上にも杉の花のハラ／＼とこぼれて來るのが、興をひいた。

舞臺の上は別として一般の光景はすべてが野趣に満ちてゐる。室町時代に京の鴨の河原や眞葛ヶ原などで行はれた勸進能の興行は、てうどころなものであつたらうと思つて幾百年のむかしのありさまを今見るこゝちがした。そのころのかういふ興行には舞臺も臨時に造つたのであつた。寛正五年の四月に三日間行はれた糾河原の勸進猿樂には、將軍義政の夫妻が臨席したが、その時の記録に、「橋がかりにも屋根あり、廣板ぶき、かうらん竹」とある。普通の場合には舞臺には屋根がふいてあつたが、樂屋と舞臺をつなぐ橋がかりには屋根も無かつたのであらうか。義政の棧敷だけは板壁がはつてあつたが、その他の大名などは、蘆簾がこひであつたといふ。一般の見物はいふまでもなく、地上に立つてゐたのであらう。

文安田樂能記に「今日見物の類……庭にあまる者は木の枝にのぼる」と書いてあつて、民衆あひでの演藝から發達して來た田樂能のおもかげが、かういふところにも見えてゐるが、猿樂の能でもこの點はほゞ同じであつたにちがひない。たゞこ

のやうな由來のものでありながら、高い藝術的精神をそれに注ぎ入れて形づくられた猿樂の能に、能そのものとしては、特殊の風格のあつたことが考へられる。

能は江戸時代にます／＼精練せられて、一面に於いては貴族的ともいはずいほるべき性質を具へることになつた。舞臺の構造にも一定の形式ができた。中尊寺のはさういふ時代に作られたものである。しかしさういふ舞臺で演ぜられる能を、このやうな場所でのやうにして見ることのできたところにやはり能の民衆的性質が保たれてゐた。

さうしてそれが今日まで續いて來たところに、興味がある。それは貴族的藝術の民衆的觀賞である。しかし現代においては、社會的地位においても教養に於いても、貴族に對する民衆といふものはない。さうしてすべての藝術の扉は、すべての人に向つて同じやうに開かるべきである。従つて、それは古典的藝術の現代的觀賞といひかへるべきであらう。

今年の十月には、この古典的藝術の精練の極致

に達した喜多宗家の演奏が、この中尊寺の舞臺において、澄みわたつた秋の明るい空氣のうちに集まる現代的觀衆に對して行はれるといふ。わたくしはまたあの野天の棧敷で但し新なる感興を以て、その盛觀に接することを期待してゐる。

平泉に於て（文博・歴史文學の最高權威）

「中尊寺奉讚式能」（昭和二十二年十月五日催行）番組より



狐 塚

松野奏風 画

中尊寺能樂堂と鏡の松のこと

中尊寺能樂堂は關山中尊寺鎮守白山權現、奉祭の御神事能舞臺として伊達家によつて造營寄進せられたもので、喜多流古法に則る能舞臺として又東奥の雄藩による古建築として、山内幽邃の境を備へて現在では全國有數の能樂堂となつてゐる。

然るに當時工事の完成に際し、故あつて鏡の松は畫かれず未完成のまゝ今日に至つてゐた。去る昭和七年頃、松野奏風畫伯始めて來遊されし折、他日機會を得て是非この松を畫いて寄進し、後世に残されたき由申出あり、爾來、十數年當時この事を語り合ひし古老はすでに亡いが、此の度一世の巨匠、喜多六平太翁を迎へて中尊寺奉讚式能催行せらるゝ絶好の機會に當り、去る八月四日東都より畫伯を山内櫻本坊に迎へて一ヶ月、畫伯畢生の彩管は振はれて忽に神木影向の松を残すと云ふ如法「鏡の松」圖は完成された。つゞいて切戸口

「竹の圖」も成り、こゝに於いて舞臺建立以來幾世霜今名筆に成る老松は、枝を重ね、青苔をいたゞき、竹根張つて爽葉を交へ、老杉の下舞臺の威儀初めて完全の威容を備へたのである。

九月一日神饌を供へて落成の式を挙げ、高砂の一節を舞諷して老松の壽を祝つた。

やがて十月五日晴れの舞臺に老匠を迎へて翁の式に鶴龜の齡をのべ、高砂の松には神舞を映し、雲井の舞には三保の松が根を想はずであらう。

ちなみにこの松の圖については、中尊寺能に關山太夫家として續く櫻本、佐々木家庭上の老松が、偶然その構圖に叶ひて生ひ立つ由にてこゝに寫し畫かれたのであるが、彼の老松もその影を永くとゞめることゝなりしを喜ぶことゝ合せてこゝに祝ひ誌す。

「中尊寺奉讚式能」番組より

中尊寺式能の印象

鈴 木 彦次郎

仰げば、高く澄んだ眞青な空だった。年老ひた杉の幹は、野外の観覧席に、ふかぶかと其の影を落としてゐた。張り廻した幔幕まなまくの隙間からはもう枯れ初めた芒すすきの波のゆれるのが、ほの見えた。――舞臺のまはりには、陸奥の秋が、しみじみと深みわたつてゐた。

それが、萱葺かやがきの古くゆかしい舞臺で、六平太翁の演ずる「羽衣」がはじまると、いつか私たちは、潮の香をたゞよはす春のそよ風に包まれるやうな感じになるのであつた。ことに神技ともいひたい「天人の舞樂」が舞はれるにつれて、いつもも知れず、彼方には春霞たなびく富士の美しい姿が仰がれ、耳には靜に寄せては返す波の音がきこえ、その夢ともつかぬ恍惚とした感じは、やがて舞ひ

納めた天人の姿が幕のかけに消えてしまつても、暫しは覺めずに、私たちは、長閑な春のどかの風情に酔ひしれてゐた。――と、ひいやり、襟すちをかすめる風に「おやー」とばかり現實にかへれば、もはや舞臺には囃子方の姿もなく、しみ透るやうな秋の陽ざしの中に、萱葺の能樂堂が寂然と靜まりかへつてゐるのだつた。

今年七十四の壽を重ねた名人の至藝は、まこと、かくまで私たちの心を秋から春へ、そして陸奥の山また山の由緒深い中尊寺の杉木立から、駿河なる三保が崎の松原に誘ひ寄せたのである。

ことに終りの、橋がかりを天上するやうに引込むシテの姿が、今や幕のかなたに消えるよと見えて、くるりと振りかへり、瞬間じいつと見入つた形のすばらしさ、――正しく、中空にたゆたふ感じを胸に受け、私は思はず「ああー」と聲を發してしまつた。シテはたゞ立ちどまつただけだ。別に何の仕草もしてゐない。それでゐて、あの美しさ、あの複雑な感情の實に的確な表現――能の傳統深き美の探究と六平太翁の完璧といひたい藝の

高さに打たれるのであった。

その外「高砂」を演じた喜多實氏、油の乗り切った野村萬藏氏の「三番叟」さては天才和泉保之君の「末廣」等についても述べたいが、私が今度の中尊寺能について、最も感銘したのは、慘澹たる水害の眞只中である平泉に於いて、敢然、喜多宗家一門を招いて、本式の五番能を催した主催者の、文化に對する認識の正しさである。

中尊寺の山から見渡せば周圍の水田は殆ど土砂に埋めつくされ、見るもむ^{さん}慘な姿であつた。その水魔の荒狂つた直後、人々の心が絶望に陥^{おち}らうとする時、この日本藝能の最も高く、最も美しい能五番の催しは、暗く沈んだ不幸な人々の胸に、美しき羽ばたきの不死鳥の姿を、きつかりと刻むものであつた。一千に近い會員の大半は、近在近郷の素朴な服装の人々であり、おそらく此の人たちも殆どみな水害に手いたく見舞はれただらうに「あゝえがったナ」「うむ二度とみられねエな」と陶酔に頬を火照らしつゝ語り會ふのをきいて、私は一しほ、今度の式能の意義の深さに感銘した

のであつた。

『能』(昭和二十二年 第一卷合併号 能楽協会発行)より



翁

松野奏風画

四寺廻廊

——慈覚大師を御縁として——

菅野澄円

平成十五年六月十二日山形県山寺立石寺において慈覚大師報恩法要ならびに四寺廻廊御朱印開眼法要が勤修された。導師は、立石寺貫主清原浄田師。大衆は瑞巖寺住職吉田道彦師、毛越寺貫主南洞頼教師、中尊寺貫首をはじめとする、四寺の僧侶。そして比叡山千日回峯行大行満酒井雄哉大阿闍梨、慈覚大師の出身地である栃木の大慈寺林慶仁住職。堂内には、山形市助役、松島町長、平泉町長を初め、四寺の檀信徒が随喜した。

東北の寺院として最も有名な四寺は、ともに慈覚大師の開基であり、「奥の細道」で芭蕉が参拝した寺々でもある。しかし、今まで瑞巖寺、立石寺とは「挨拶程度」の交流にとどまっていた。寺がこの状態では、全国から参拝されるお客様が四寺の歴史的繋がりを知らないのは仕方のないことである。宗派や、宮城・山形・岩手とそれぞれの行政区

が違う事も原因の一つではあるが、今まではそれぞれに抱える問題をそれぞれが何とか解決できた時代だったのかもしれない。

人類の科学とテクノロジーは、たった数十年で人間の生活を大きく変え、便利になった。しかし、昨今耳を疑うような事件の絶えないことは、人間の精神と身体はそれに対応しきれないことを物語っているのではなからうか。刃物は人間の生活に不可欠だが、間違えれば他も自分をも傷つける。人々の心の抛り所として宗教者の存在意義が問われている時代である。さらに文化財の保存管理、歴史的景観・史跡・自然環境の保全、また観光地としていわゆるバリアフリー等、寺院に求められる責務は多岐にわたる。歴史的背景や寺院としての規模が似通う四寺が協力することによって、様々な効果が現れることを期待し各寺へ連絡を取ったのは平成十四年の秋のことである。

四寺の皆さんにも趣旨はすぐにご理解頂けた。持ちまわりで各寺を会場に、現状や抱えている問題点などの情報を交換しあう連絡会が開催された。会議の中で、四寺の歴史的繋がりは、参拝者にとっても意味あることであるから、

まずはこれを軸に活動を始めることが決まった。

その第一として新たな御朱印事業が開始された。四寺を巡礼する歓びの一つとしてもらおうというものである。四寺の担当者からは様々な意見が出され御印を四つ頂戴して初めて大意の顕れるものをめざし活発な議論がなされた。

御朱印に關しての準備は、瑞巖寺様を中心に進めて頂いた。松島の湊から杉並木の参道を抜けると、凜とした空気の中に瑞巖寺はある。臨濟宗妙心寺派の寺院である。伊達政宗によって復興造営された桃山時代の代表的建造物で、本堂・御成玄関、庫裡・回廊は国宝に、御成門・中門・太鼓塀は国の重要文化財に指定されている。その境内の銘木「臥龍梅」を印材としてご提供頂いたことは盲亀浮木のごとき仏縁であった。

四寺を顕すための名前が決まるまでには、かなりの時間を要した。名は体を表す。何事においても名前というものは大事である。事に携わる者すべてがこの活動を成功させたいと願えばこそその議論であった。「四寺廻廊」東北の大地という廻廊を廻り四寺を訪ねる。慈覚大師がみちのくに寺を開いていった意味、ひいては「佛の教え」という一つ

の「寺」の廻りを一巡りするのである。また、できあがった御朱印の四角い印影も、四つで一つの四寺とその廻廊をイメージさせるものとなった。「佛」「法」「僧」「寶」の四つの印が作られ、中尊寺は「佛」の印をお預りすることになった。

この御朱印授与を始めるに当たり、六月十三日という日を選んだ。

承和五年六月十三日。午時。第一第四兩船諸使駕船。

縁無順風、停宿三箇日。

慈覚大師が唐に渡った九年半の記録『入唐求法巡礼行記』の書き出しの文である。「この日の正午頃、舟に乗り込んだものの順風とはいかず、三日ほど停泊した。」という内容。物語ではない現実を感じる文章だ。事務局を担当した筆者にとっては、この文章が四寺廻廊にふさわしい文章に思えた。

その六月十三日から参拝者に御朱印を授与するには、開眼された御印が四寺になくはならない。そこで前日に四寺合同で開眼法要を行う事になった。この平成十五年六月十二日が大安であったことも、さらに酒井雄哉大行滿と大

慈寺御住職にご参列頂けたことも、すべては慈覚大師を縁とした仏様のお導きと思える。酒井大行満は平成四年に比叡山から青森の恐山まで行脚巡礼を敢行した。それは慈覚大師の道でもある。当然この四寺にも参拝なさっている。

今回は四寺への強力な応援団長と言える。平成十三年一月に、一関においてミュージカル「円仁」が公演され中尊寺、毛越寺の僧侶が声明をお唱えしたことは寺報九号にもご報告しているが、大慈寺御住職の林慶仁様は、その総合アドバイザーであった。やはり慈覚大師を縁として参列いただいたのである。

立石寺の根本中堂で清原浄田師の導師によって開眼された四寺の御朱印は、四寺の青年僧が携えて、酒井雄哉大行満を先頭に壇信徒とともに、慈覚大師の墓所である山上の開山堂へ参拝した。境内は、四寺の壇信徒のみならず全国から参拝の方々を迎えていた。おりしもサクランボのシーズン真っ盛りである。当然のことながら四寺廻廊を知る人はほとんどいないが、「あ、酒井さんだ。」「瑞巖寺、中尊寺、毛越寺、みんなこれから行くところですよ。」という声はあちらこちらから聞こえた。石段を登って開山堂まで

行く壇信徒はほとんど無いかと心配もしていたのだが、半数以上が参拝を果たした。そこには七十歳のご婦人も見受けられ、助け合いながら開山堂を目指していた。開山堂では特別に御開扉いただいた慈覚大師像の御前で、酒井大行満によって四寺の御朱印の御加持がなされた。

三市町の観光課、観光協会、商工会にもご協力いただき、物産展も開かれた。三市町はわずか百キロあまりの圏内でありながら、それぞれに特色ある物産を出品していた。これを機にこのような活動が継続的に行われることが期待される。

御朱印の授与を開始した六月十三日午後三時には、最初の結願の方があった。聞けば、事前の新聞報道を読み心待ちにしていたとのことである。貫首もお喜びになり、自ら御朱印と記念の色紙をお渡しになった。

現在は、四寺三市町がお互いを知る時間である。人の繋がりでは絆となり、四寺廻廊を支えて下さるのだと信じている。四寺廻廊を支えて下さっている皆様、御参拝の皆様への感謝とともに、その期待に応えられるよう今後の活動を進めてゆきたいと思う。

(総務部次長)

叡山講福聚教会東日本大会に参加して

菅野美弥子

平成十五年十月九日千葉県成田市で開催された第二十二回東日本奉詠舞大会に於いて、今回初の合同チームで参加した中尊寺毛越寺支部は詠唱の部「大黒天和讃」で優勝、詠舞の部「慈覚大師和讃」で三位に入賞しました。

この東日本大会は二年に一度開かれ「詠讃道を通じて大師のみ教えと信仰の輪と明るい社会づくり」を目標にし、今回は「飛翔、己を後に他を先に」というテーマを掲げ、詠唱の五十三チーム、詠舞の部十二チーム、寺庭婦人十三チームと計七十八チーム約千四百人の参加でした。地元の方々は会場に入りきれず別室のテレビでご覧になるという盛況でした。我々は今回初めて二泊して座主殿下をお迎えしての開会式から成績発表や講評のある閉会式まで参加しました。前大会でも優勝しましたが舞台が終るとすぐ帰路につき帰りのバスの中でその事を聞くといいものでした。連続優勝はむずかしい事と今回は練習期間が短かった事も

あり、せめて三位以内には入りたいと思っていました。大会前の二ヶ月程は月二回の練習をほぼ毎週にして先生の御指導を受け、毛越寺支部の五人も加わり総勢二十八名、お唱えはもちろん鈴鐘の所作や、他の曲にはない本をめくりながらのお唱え、舞台への出入り、詠唱時間の調節などにがんばって来ました。詠舞を舞う方達はその他にも週一回の猛練習を重ねてこられたのです。成田へ向かうバスの中でもホテルでも、そして会場の成田国際文化会館でも最後の練習をし、いよいよ舞台へと上りました。

まず詠舞の舞台です、舞うのは十人、地方は十八人、緊張の中演技をしましたが充分実力が出せたとはいえないように思えました。そして中十番おいて詠唱の番が来ました。落着け、落着けと自分に言い聞かせ、先程は見る事が出来なかった客席にも目を向けました。句頭師の素晴らしい着いた唱え出しに皆も落着いて続き、声も良く出て鈴鐘もそろっていたようで心なしか拍手も大きかったような気がしました。演技が終ると安心して他の支部の演技を見せていただきましたが、どのチームも一生懸命練習された事が良くわかり、優勝するのではと思えるチームがいくつもあ

り大変勉強になりました。

さて全チームの演技が終了し閉会式となり、審査員長の即真尊寵師の講評と入賞発表が始まりました。講評では優秀なチームが多く審査がむずかしかった事や赤房の多いチームでもむずかしい曲目に挑戦している事への評価、聞いている側の作法等についてお話があり、いよいよ発表です。詠唱の部は七位までが入賞です。七位から二位まで他の支部の名が呼ばれがっかりしたその時「一位五十九番中尊寺、毛越寺支部」と読み上げられ皆驚くやら嬉しいやら、続いて四位までが入賞の詠舞の方も二位と同点の三位に入り本当にはっとしました。これも佐々木仁秀先生の的確な御指導と、日頃中尊寺の各法要に参列して御詠歌をお唱えさせていただいている事の成果と思います。又毛越寺支部との合同チームであった事もパワーアップとなり連続優勝につながったのではないのでしょうか。これからも詠讃道を通じて大師のみ教えを学び会員の皆様と共に明るく楽しい中尊寺支部であるようがんばります。

台掌

(真珠院寺婦・福聚教会中尊寺支部幹事)



開宗1200年度讃 平成15年度叡山講福聚教会



東日本奉詠舞大会



境内樹木の樹勢診断・治療について（報告）

昨年十月一日夜に台風二十一号が襲来し、金色堂前にあった樹齢三百年以上と思われる杉の大木が倒れた。

この事態に寺では金色堂付近の樹木について緊急樹勢診断を樹木医の方に依頼、その結果、危険木と判定された二本は昨年十二月初旬に樹幹上部が除去されたのだった。

今年、防災および景観保護の観点から、表参道沿いの樹木について樹勢診断を実施し、必要に応じて樹勢回復治療を行うことを決め、昨年に引き続き樹木医の神山安生氏にお願いし、五月十三日から八月二十日までの間に延べ十五日間にわたり作業を実施していただいた。

樹勢診断は対象を月見坂上り口から本坊裏門に至る参道沿いの杉・モミ・サワラの合計百八十三本とし、方法は腐朽及びびり（ムネアカオオアリ・クロオオアリ・ヨツボシオオアリ・ウメマツアリほか）の加害による穴の有無などの調査と、木槌を用いて樹幹に空洞音がしないか調べる、の二点を中心とした。

その結果、十二本についてはさらに精査の必要上から二次診断を行った。方法は、根元から高さ六十cmの位置で生長錐を用いて東西南北の四カ所から材片を取り出し、健全部の厚さを測定することを基本とした。最終的に危険木と判定されたものに関しては、危険部位を除去する作業を実施していくこととした。

樹勢治療は診断結果を受けて、腐朽部分を除去、殺菌剤としてヒバ油を塗布し、木固剤を使用して該当部分を保護した。アリの加害部分も同様の処置を行い、さらに殺アリ剤「アンツハンター」を使用してアリを駆除した。また外科的治療として梢頭部（梢の先端部分）が枯死しているものはその部分を除去し、金属製の蓋をつけ、そこからの腐朽及び雨水の浸入を防ぐこととした。

以上、今年度の境内樹木の樹勢診断・樹勢回復治療について概要を報告したわけだが、今後とも継続的に必要な作業を実施し、災害の防止と景観の保護に努めていきたいと考えている。

（管財部次長 佐々木秀厚）

研究／出版

平成十四年十二月～平成十五年十月

〔出版〕

『花咲けみちのく 地に実れ』

千田孝信著

中尊寺

『東国平泉』―白山信仰と共に世界遺産へ―

小野祐貴著

岩手日報社

週刊おおくのほそ道を歩く1『奥州街道 平泉』

角川書店

週刊日本遺産27『平泉』

朝日新聞社

日本史リブレット18『都市平泉の遺産』

入間田宣夫著

山川出版社

街道の日本史7『平泉と奥州道中』

大石直正・難波信雄編

吉川弘文館

『秀衡公の組紐―中尊寺の組紐―』

西城志郎著

悠研究所

『平泉文化研究年報』第三号

岩手県教育委員会

(所収論文・執筆者は次の通り)

「浄土への憧憬―無量光院と宇治平等院―」

京都府宇治市歴史資料館主任

杉本 宏

「歌枕の用例分析からみる平安中期東北支配の推移」

京都大学文学部研修員

渕原智幸

「武士の館の構造―侍所について―」

山形県立米沢女史短期大学日本史学科助教

吉田 歆

「平泉文化に見える北と南」

平泉町世界遺産推進室室長補佐

八重樫忠郎

「考古学から見た東北北部における中世社会の成立」

環濠集落の終焉としての柳之御所遺跡 中央大学史学科教授

前川 要



『白い国の詩』

東北電力(株)

(特集「東北の中世」と題して連載された中から関連するもののみ掲げた)

「奥大道―姿を現しだした中世の道」(2月号)

青山学院大学教授 藤原良章

「描かれた中世の村」(3月号)

東北学院大学教授 大石直正

「十二世紀日本列島の北と南」(8月号)

東北大学助教授 柳原敏昭

「古代中世東北の铸件生産」(10月号)

京都橘女子大学教授 五十川伸矢

〔論文〕

「寺塔已下注文に見える雲慶について」『岩手史学研究』第八六号 川島茂裕

「藤原基衡と秀衡の妻たち―安倍貞任の娘と藤原基成の娘を中心に―」

『歴史』第一〇一輯 川島茂裕

「奥羽における輸入陶磁器の受容」

『中世奥羽の土器・陶磁器』高志書院 八重樫忠郎

「平泉におけるかわらけの用途と機能」

『中世奥羽の土器・陶磁器』高志書院 羽柴直人

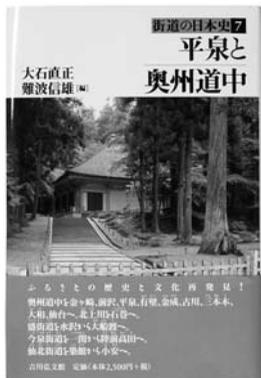
「平泉」

『季刊 考古学―特集 中世前期の都市と都市民―』第八五号雄山閣 及川 司

「自然界からの贈り物―昔の人は知っていた青森ヒバ成分中の生理活性物質―」

『医薬ジャーナル』4月号 稲森善彦・森田泰弘・岡部敏弘・石田名香雄

(中尊寺仏教文化研究所『論集』第2号に再録の予定)



〔報告書〕

『中尊寺を中心とする奥州藤原文化圏の宗教彫像に関する調査研究』

研究代表者 東北大学大学院文学研究科教授 有賀祥隆

『柳之御所遺跡第56次調査概報』岩手県文化財調査報告書第一一七集

岩手県教育委員会

『猪岡館跡第2次発掘調査報告書 一閑遊水地事業関連遺跡発掘調査』

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第三九八集

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

『泉屋遺跡第16・19・21次発掘調査報告書』

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第三九九集

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

『本町Ⅱ遺跡第2次発掘調査報告書』

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第四一〇集

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

『平泉遺跡群発掘調査略報』平泉町文化財調査報告書第八一集

平泉町教育委員会

『一閑遊水地内圃場整備関連遺跡発掘調査報告書—竜ヶ坂遺跡第1次・佐藤屋敷

遺跡第2次・畑中遺跡第1次—』平泉町文化財調査報告書第八二集

平泉町教育委員会



秀衡公の組紐
—中尊寺の組紐—
西城志郎



中尊寺に眠る藤原秀衡公の御棺から
見つかった一条の組紐。五十年來の
謎を解明。

一条の組紐の取とみから、日本伝統の組紐の
歴史と重要な役割を明らかにする。——

岩手研究所

(平泉町世界遺産推進協議会会報 平成14年11月1日)

奈良には世界遺産へ登録された物が数々あり、平泉町が今、『世界遺産』という大きな目標を持ち、それにあった町作りへ向けてがんばっていて、私には、その平泉町に住めていてとてもうれしいです。

ですが奈良について奈良の町を見て、人を見て、道を歩いて……

一番はじめに思ったのが、どこからともなくやってくる『自信』です。

これは、三日間とも心の中でいつも思っていました。上手に言えませんが、何と申うのでしょうか……。『平泉町に無い物』を持っているのに気が付きました。それは一日目にずっと「何だろう。何がちがうの？平泉町に無い物ってなんだろう？」と、本当にそれがくやしかったです。

法隆寺、東大寺、薬師寺、春日

大社などさまざまなところへ行くのと、「すばらしいな。スケールのちがいかな。」と圧倒されながら思いました。奈良の知らない方から、「どこから来たん？」と聞かれ、「平泉町です。」と答えると、「ああ、あの平泉町ねえ。勉強がんばってね……。」その方は、次々に奈良のすばらしさをみごとに教えて下さいました。

「平泉町は何がすごいのか」と言われ、金色堂、中尊寺、毛越寺などを自分でできるかぎり言いましたが、うまく言えなくそれが、今でもひきずっています。

さて、それでくやしき思いからじょじょにこう思うようになりました。『ほこり』です。奈良にあつて平泉に無い物それは、『自信』

と『ほこり』です。自信があるから言える。ほこりがあるからこそ堂々とできるんだと思います。

私にはむずかしいことは良く言えませんが、平泉町には遺産登録へ向けてやっていくことがたくさんあるけれど、その前に気持ちから変えていくことが大切なのではないでしょうか。私は今平泉町をほこりにしています。自信は、奈良の人には負けません。私は奈良の歴史についてぎっしりとメモしましたが、それで得た物がこれです。あれだけ調べてこれだけ、奈良に行かなかつたら町をなおすだけ、変えるだけで、一番大切な物を失っていたと思います。平泉町の一人一人に伝えたい気持ちは『自信』と『ほこり』です。

風信 / 語録 〈独自性と普遍性〉

(10月の郵便受から)

先日は私ども多摩美術大学造形学科の古美術研修ゼミに、お忙しい中お時間を割いて頂き学生ともども厚く御礼申し上げます。御講話の内容が今回の研修ゼミの核となりました。日本の文化、空間、自然観を体験することにより、多角的な思考を養い制作に生かす目的のゼミでした。

今回のテーマは、独自性、普遍性にしぼって毛越寺、中尊寺を見学地としましたが、国宝第一号の意味、内容をお聞きし、根本原理の一端が探れました。貴重な講義、保存フィルムの上映など古美術研修としても教員学生共々、十分成果のある研修になりましたこと、厚く御礼申し上げます。多摩美大にとって平泉の地は初めての試み

でした。多様化する潮流の中で中尊寺の研修は、大切なものとなりました。

今後とも御地への研修を続ける所存です。御指導宜しくお願い致します。

中尊寺執事長様

(多摩美術大学造形学研究室 Y・I)

先日は公私にご多忙の中、私

達のため長時間にわたり御本山のご説明をいただき、御地の歴史を再認識させていただきまして、今回の視察研修が、大変実のあるものとなりました。

御地を訪問して感心させられたのは、県民一丸となり世界文化遺産へ加入に向けて貴寺や各遺跡の調査・保存に上手く溶け込んでい

ることです。また、訪問したところの博物館や埋蔵文化財センターでも担当者の皆様方に鄭重なるご説明やご対応をいただき、私たちも見習わなければならない点が多々ありました。これら、今回の研修で得たものを、当町の文化財保護活動に活かしていかなければならないと、帰路の車中で話題となりました。

御地が世界遺産へ早期に加入できますよう、委員一同期待致しております。

中尊寺執事長様

(静岡県富士川町教育委員会)

〔関山句囊〕

〈第四十二回 平泉芭蕉祭全国俳句大会（於毛越寺より）〉

羅の袈裟の袖づれ芭蕉祭

（岩手県知事賞）

齊藤夏風選

特選

盛岡市

葉上くに於

花あやめ摘まれ積まるる猫車

（毛越寺賞主賞）

齊藤夏風選

特選

北上市

及川 和子

金鶏山の松離れたる梅雨の蝶

（岩手日報社賞）

齊藤夏風選

特選

北上市

菅原多つを

暮鳴いて辨慶堂を昏くせり

原田青児選

特選

水沢市

佐々木道子

万緑に点晴として光堂

戸塚時不知選

特選

一関市

佐藤 冬扇

梅雨の蝶光堂より翔らにけり

秀逸

一関市

砂金青鳥子

（兼題）

朱唇佛弥生の空に匂ひけり

戸塚時不知選

特選

宮城県

佐藤 みね

ゆく春や迦陵頻伽の鳥の聲

小林輝子選

特選

一関市

砂金青鳥子

一門の興亡ここに雪浄土

『みちのく』四月

平泉町

齊藤その女

山茶花の一樹の孤高円乗院

同

一坊の堀の内なる初鼓

同

寒晴れや倒木一本光堂

『みちのく』四月

前沢町

服部 常子

山桜山王堂の遠き鐘

『みちのく』六月

平泉町

齊藤その女

茅葺の能の舞台に余花の雨

『みちのく』八月

川越市

丸山千恵子

礎石のみ無量光院末枯るる

「みちのく歳時記」より 斉藤その女

鞘堂や一番星は蜘蛛の囀に

『草笛』六月 前沢町 千葉 宣峰

西行の碑や美しき蛇と会ふ

『草笛』八月 滝沢村 新山のぼる

夏草と世界遺産へ義経堂

『草笛』八月 一関市 佐藤喜佐子

借景は束稲山といふ夏座敷

『草笛』十月 前沢町 千葉 宣峰

逆光に夏蝶の舞ふ能舞台

『草笛』十月 水沢市 及川テツ子

弁慶の墓守る樹油蟬

『草笛』十月 千厩町 佐藤 曲水

観音の微笑に似て座禅草

「たばしね」四月 平泉町 佐々木邦世

万縁の中一筋の衣川

「たばしね」六月 平泉町 三沢 恵実

屋根に雪三衡祀る光堂

「読売俳壇」二月 茨木市 寺本 光堂

正面の氷柱は折られ光堂

「毎日俳壇」三月 鎌倉市 渡部志津子

中尊寺仏しづくかに春近し

「読売俳壇」四月 奈良県 佐々木利江

人声の去りてかなかな光堂

「読売俳壇」十一月 東京都 東 賢三郎

〔中尊寺讚衡藏だより〕

本年開催のテーマ展と館藏品展（回顧）

北嶺 澄 照

はじめに

本年の讚衡藏の展示に関しては、讚衡藏運営委員会において、平成十五年が中尊寺鎮守白山神社能舞台が再建百五十年という大きな節目の年であるというところから、能舞台に関連したテーマ展をゴールデンウィーク前から夏休み終了時期まで開催する。また、一年の内でもっとも多くの参拝者が訪れ、なおかつ温湿度が比較的安定している秋期には、前年と同様に館藏の優品を展示する館藏品展を開催するとの方針が示された。

この方針に従い、企画展示室において四月二十六日から八月三十一日の日程でテーマ展「祈りと祭り」を開催し、第二回となる館藏品展「小さく貴いもの」―金色堂須弥壇内副葬品―を十月十一日から十一月三十日まで開催した。

テーマ展「祈りと祭り」

開催期間 四月二十六日～八月三十一日

開催日数 百二十八日間

本展は白山神社能舞台が再建されて百五十年という節目の年にあたり、現在まで途絶えることなく続いてきた古実こじつ式三番しきさんぱん（中尊寺の延年ともいわれる）と能楽に関する資料を中心とした展示で、中尊寺における「祈りと祭り」あるいは「伝統」といったものに想いを馳せていただければという趣旨のもとに実施した。開幕直前の四月十八日に、国の文化審議会が白山神社能舞台を重要文化財指定するよう答申（期間中の五月三十日に官報告示され正式指定）ということも重なり、タイムリーな展示となったことは幸運であった。

館藏品展「小さく貴いもの」

開催期間 十月十一日～十一月三十日

開催日数 五十一日間

第二回目となる本年の館藏品展は、昭和二十五年に行われた奥州藤原氏御遺体学術調査の際に発見された「金色堂

須弥壇内副葬品」を中心とした展示である。その多くは経年劣化による破損等により傷んでいるものが多い。しかし、そのように小さな一片のものであっても平安時代の遺品として貴重なものばかりである。今回は平素公開していないものを含め「金色堂と共に先人たちが遺してくれた小さく貴いもの」をみなさまにご覧いただくこととした。

展示をふりかえって

テーマ展「祈りと祭り」では展示手法、展示の切り口を含めて工夫が不足していたことは否めない。今後とも「並べただけの展示」とならぬよう努めなければならない。展示と併せて白山神社能舞台での演能のビデオ（能「秀衡」）を上映し好評を博したのはせめてもの救いであった。

館蔵品展「小さく貴いもの」においては企画展示室のライティングについての指摘を受け、開幕後に一部を修正したことは反省すべき点である。資料の説明についてはできる限り文字を大きくし、振り仮名を付したのでこの点に関しては前回と比較して改善できたと考えている。

二つの展示に関して共通する反省点は広報の不足という

ことである。中尊寺のホームページには記事を掲載したものの、それ以上の広報活動はしていないに等しい。報道機関への取材依頼・情報提供のあり方については今後の大切な課題である。

尚、展示の記録として展示品リストと写真を掲げることとする。
(管財部執事)

中尊寺鎮守白山神社能舞台

再建百五十年・重要文化財指定記念

テーマ展「祈りと祭り」主な展示品リスト

古実式三番 こじつしきさんば 関連資料

翁面 おきなめん 南北朝時代

若女面 わかしよめん 重要文化財 鎌倉時代

老女面 らうじよめん 鎌倉時代

【パネル展示】

古実式三番 「開口」・「祝詞」

「若女」・「老女」

能楽関連資料

能面「釣眼」・「中将」・「邯鄲男」

「笑尉」・「大飛出」・「童子」

「鷲鼻悪尉」・「真角」・「天神」

【パネル展示】

御神事能「竹生島」・「秀衡」

中尊寺新能「翁」・「道成寺」

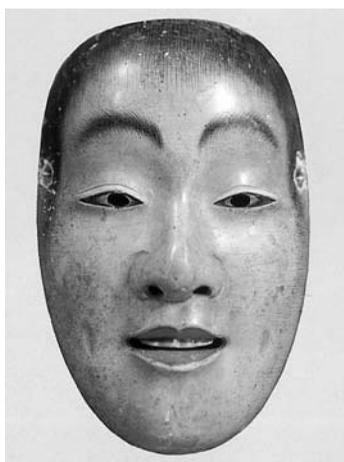
尚、資料映像として能「秀衡」のビデオを上映した。



若女面

重要文化財・鎌倉時代

この若女面は、面裏に「正応四年三月二十四日 別当了禪」の刻銘があり、鎌倉時代末期の正応四年（1291）の作であることがわかる。能面に先行する古面で、在銘最古のものとして貴重である。



能面「童子」



古実式三番「若女」

中尊寺讚衡藏 第2回館藏品展

小さく貴いもの「金色堂須弥壇内副葬品」主な展示品リスト

赤木柄螺鈿呑口式腰刀

重要文化財 平安時代末期

赤木柄短刀

重要文化財 平安時代末期

木刀子

重要文化財 平安時代末期

鹿角装鞘残闕

重要文化財 平安時代末期

大刀

重要文化財 平安時代末期

鮫皮残片

重要文化財 平安時代末期

丸打紐

重要文化財 平安時代末期

首桶

重要文化財 平安時代末期

中尊寺ハス(標本)

ハスの種子

平安時代末期



銀象嵌部分を拡大したもの

赤木柄短刀

重要文化財・平安時代末期

柄は南洋舶来といわれる赤木で、素地に夜光貝で文様を象嵌している。現在は小鳥と思われる一羽のみが残存している。

刀身は半ば近くを失っているが、背の部分には精巧な銀象嵌で唐草文様が施されている。このように刀身に象嵌された文様が施されているものは全国的にも数例のみで、いずれも平安時代以前のものであることが指摘されており貴重な遺品である。

中央壇の棺(清衡棺)から発見されたものである

〔陸奥教区宗務所報〕 第二部 中尊寺関係

平成十四年十一月一日～平成十五年十月三十一日

□ 平成十五年

二月二十日

陸奥教区研修会 於中尊寺

「法華経を学ぶ」

講師 多田孝文師

山内より二十一名参加



三月三日、四日

布教養成所研修会 於中尊寺

「悉曇の基礎と塔婆の書き方」

講師 後藤仁田師

山内より十七名参加



六月二十三日、二十四日

東北・北海道地区布教師連合研修会 於山形県内

山内より三名参加

六月二十四日

天台宗保護司・民生児童委員総会・研修会

於天台宗務庁

地藏院 佐々木秀圓出席

八月六日

一隅総本部よりの地震復興支援金五十万円を贈呈

於宮城県庁

一隅陸奥本部長 菅原光中出向

八月二十六日～二十九日

教師安居会 於延暦寺西塔居士林

法泉院法嗣 三浦章興参加

予備委員任命 薬樹王院

北嶺澄照

(同年十月一日)

予備委員任命 瑠璃光院

菅野康純

予備委員任命 真珠院副住職

菅野澄円

陸奥教区宗務所

(平成十五年十月一日)

所長任命 大長寿院

菅原光中

副所長任命 真珠院

菅野澄順

庶務主任任命 大徳院 佐々木慎宥

財務主任任命 円教院法嗣

千葉快俊

教務主任任命 薬樹王院

北嶺澄照

社会主任任命 観音院 清水広元

開宗千二百年慶讃大法会教区事務所

(平成十五年十月一日)

所長委嘱 宗務所長 菅原光中

陸奥教区布教養成所

(平成十五年十月一日)

所長委嘱 中尊寺 千田孝信

主事委嘱 円乗院 佐々木邦世

□ 役職任免

陸奥教区地方選挙管理委員会

(平成十五年七月二十八日)

委員任命 願成就院 三浦高信

事務局長委嘱

積善院

佐々木仁秀

□ 褒賞

(平成十五年十月二十三日)

陸奥教区寺院問題対策委員会

住職勤続三十年表彰

真珠院

菅野澄順

(平成十五年十月一日)

委員委嘱

地藏院

佐々木秀圓

陸奥教区所得調査委員会

□ 住職任命・解任

(平成十五年十月一日)

任命 (平成十五年二月十九日)

委員委嘱

金剛院

破石澄元

寶性院兼務住職

大徳院

佐々木慎有

一隅を照らす運動陸奥地方本部

(同年七月七日)

(平成十五年十月一日)

本部長任命

宗務所長

菅原光中

(同年十月一日)

理事委嘱

地藏院

佐々木秀圓

寶性寺兼務住職

積善院

佐々木仁秀

円乗院

佐々木邦世

起教坊兼務住職

宗務所長

菅原光中

積善院

佐々木仁秀

□ 教師補任 (平成十五年四月二十一日)

地藏院寺婦

佐々木素子

権大僧正

地藏院

佐々木秀圓

事務局次長委嘱

大徳院

佐々木慎有

権大僧正

真珠院

菅野澄順

事務局員委嘱

円教院法嗣

千葉快俊

権大僧都

薬樹王院

北嶺澄照

薬樹王院

北嶺澄照

観音院

清水広元

☆ 天台宗一隅を照らす運動「世界寺子屋基金」

募金実施中

御神事能番組

五月四日

法楽

古美式三番

開口 清水広元

祝詞 佐々木秀厚

若女 菅野宏紹

老女 菅原光聴

大鼓 千葉快俊
小鼓 三浦章興
後見 菅野澄照
北嶺 菅野澄照

能

竹生島

天女 佐々木五大
ツレ 三浦章興
シテ 佐々木邦世

ワキ 菅野成寛

ツレ 菅野康純

間 菅野澄円

太鼓 菅野宏紹
大鼓 千葉快俊
小鼓 菅原光中
後見 佐々木秀圓

古美式三番

五月五日

開口 清水広元

笛 菅野澄円
後見 千葉快俊

能

田村

シテ 北嶺澄照

ワキ 菅原光聴

ツレ 菅野康純

間 佐々木慎有

大鼓 佐々木長生
小鼓 佐々木仁秀
笛 清水広元

秋の藤原まつり 中尊寺能

十一月三日

能

紅葉狩

ツレ 佐々木五大
ツレ 三浦章興
後シテ 北嶺澄照
前シテ 佐々木邦世

ワキ 菅原光聴

ツレ 菅野康純

ツレ 佐々木秀厚

ツレ 佐々木亮王

間 供 女 菅野澄円

武内の神 佐々木慎有

太鼓 菅野宏紹
大鼓 千葉快俊
小鼓 佐々木仁秀
笛 清水広元

執務日誌抄

平成十四年十二月二十五日

十五年十一月十日

平成十四年

◇十一月

二十五日 秋期一山会議（大広間）

二十六日 総務部澄円、新潟へ出張（

二十八日、観光キャラバン 新潟・

山形方面）。

二十七日 名鉄観光東北六県仕入関係

者十名来山（総務部快俊案内）。

二十九日 貫首、日光へ出向（いっくら

国際文化交流会打合せ）。

初詣警備に係る事前打合せ

会（管財澄照・秀厚 於役場）。

三十日 北坂上り口地藏尊開眼法要

（町道拡幅による移設のため 大

長寿院光中・執事長・管財澄照・

法務広元及び地元関係者の方）。

◇十二月

一日 月次大般若（本堂）

参道清掃（管財、ガイド事務所
の方々にもご奉仕いただいた）。



二日 危険木処理作業（三日、金

色堂前杉大木二本）

三日 平泉パイパス及び堤防設計

説明会（執事長 於役場）。

六日 毛越寺南洞頼教新貫主、就

任挨拶に来山（貫首・執事長
応接）。

七日 薬師会（讀衡蔵）

薪能の会役員会（執事長）。

九日 初詣警備会議（執事長澄照・
秀厚 於西行苑）。

十一日 国土交通省ナイル川・北上

川姉妹河川構想事務打合せ
（執事長 於盛岡第一号）。

町世界遺産推進協議会役員

会（管財澄照 於役場）。

佐野美術館・大阪歴博・一

関市博特別展「草創期の日

本刀」に出陳のため清衡棺

上刀（重文）他一点を搬出

（佐野美術館渡邊館長来山 管財

澄照立会）

十二日 貫首、一関市にて講話（関

東自動車工業㈱桐友会第三回講演

会 於ペリーノH）。

十三日 総務部澄円、仙台へ出張（丁

R東日本仙台支社）。

町観光協会役員会（執事長・管財部秀厚 於岩間会館）。

十四日 弥陀会（本堂）

十五日 世界遺産講演会（貫首・執事長・管財澄照 於日武蔵坊）。

お経を読む会（大長寿院）

十六日 防火水道バイパス管工事（十九日、管財部秀厚立会）。

十七日 白山会（本堂）

十八日 貫首、執事長、総務部澄円、仙台へ出向（四カ寺連携会議 於仙台且）。

総務部快俊、盛岡へ出張（教育旅行誘致宣伝部会幹事会 於農林会館）。

十九日 町都市計画マスタープラン策定懇話会（管財澄照 於役場）。

二十日 煤払い（マスクミ各社取材）

寺報『関山』第九号発行

文殊会（経蔵）

二十四日 藤島亥治郎先生を偲ぶ会決算報告（執事長 於役場）。

二十六日 無量光院跡調査整備専門部会（二十七日、執事長 於役場）。

町観光キャラバン実行委員会反省会（総務 於役場）。

二十八日 恒例御供餅つき

三十一日 午後三時 一山総礼

平成十五年

◇一月

一日 ○時 新年祈禱護摩供修行（本堂）

六時 東山町〈若水送り〉着

九時半 正月祈禱護摩（本堂）

十時半 総礼

修正会 釈迦供（本堂）

冬堂籠り（結束勤、五日まで開山堂）

二日 九時半 正月祈禱護摩（本堂）

修正会 薬師供（峯薬師、讚衡蔵）

十四時 謡初め（庫裡広間）

三日 九時半 正月祈禱護摩（本堂）

修正会 山王供（山王堂）

十一時半 元三会 慈恵供（本堂）

四日 修正会 薬師供（瑠璃光院薬師堂）

五日 修正会 文殊供（経蔵）

大般若会（利生院弁財天堂）

六日 修正会 釈迦供・月山供（釈迦堂）

本日より寒修行（行者四名、町内托鉢）。

七日 修正会 白山十二面供（本堂）

大般若会（本堂）

十四時 修正会 弥陀供（金色堂）

春の例祭御神事能番組、「竹生島」「田村」に決定

八日 修正会 薬師供（旧関伽堂薬師、讚衡蔵）一字金輪仏・千

手観音法楽
修正会結願

十三時半 恒例「金盃披き」

九日 新年挨拶回り（盛岡・一関・平泉 執事長）。

十日 文化財防火訓練事前打合せ

（管財部秀厚 於役場）。

節分会講中会議（執事長・法務広元他 於泉橋庵）。

十四日 慈覚会（御影供 本堂）

お経を読む会（貫首）

十五日 文化財防火訓練実施に伴う打合せ（執事長・管財澄照 於役場）。

十六日 町都市計画マスタープラン策定懇話会（管財澄照 於役場）。

十七日 入江正巳画伯来山（執事長応接）。

十八日 JCB心の旅中尊寺ツアー 一班来山（地藏院法話 本堂）。

二十日 執事長、盛岡へ出張（北上川リバーカルチャーアソシエイシ

ョン発起人会 於Hメトロポリタン盛岡）。

JCB心の旅中尊寺ツアー

二班来山（真珠院法話 本堂）。

二十一日 菊まつり写真コンテスト審査会（広間）。

二十三日 駒込学園理事長末廣照純師来山（貫首・執事長・澄順・仁秀応接）。

二十四日 平泉芭蕉祭全国俳句大会打合せ（執事長 於役場）。

二十六日 文化財防火デー

二十九日 商工会講演会（執事長 於商工会館）。

天台宗ハワイ別院荒了寛師来山（貫首・執事長応接）。

◇二月

一日 月次大般若（本堂）

三日 恒例大節分会。関取朝赤龍招く。歳男歳女七十三名、町内園児が豆を撒く。

寒修行満行

四日 天台寺執事長来山（貫首・執事長応接）。

五日 文化財取扱等講習会（七日、管財澄照・宏紹・光聴・章興 於県立博物館）。

貫首、町内にて講話（県南監査委員会 於役場）。

執事長、町内にて講話（シルバー人材センター 於商工会館）。

六日 町文化観光振興運営委員会

八日 シテ方御神事能稽古始め。（佐々木多門師、澄照・章興）。

九日 天納久和師来山、声明研修（十日、大広間）。

十日 総務仁秀・澄円、松島へ出張（四カ寺連携会議 於瑞巖寺）。

十二日 町上下水道事業運営協議会（管財澄照 於町保健C）。

世界文化遺産登録指導委員会（執事長 於役場）。

十三日 岩銀友の会講演会（総務部快

俊 於毛越寺(レスト)。

十四日 執事長、町内にて講話(門前会研修会 職員七名参加 於西行苑)。

経済同友会新春講演会(総務仁秀 於岩間会館)。

涅槃会御逮夜(本堂)

十五日 涅槃会(本堂)

お経を読む会(大徳院)

町観光協会役員会(執事長)

関東自動車社長内川晋氏・秘書

室長山尾氏他来山(貫首心接・

参務秀圓案内)。

十七日 総務仁秀、澄円、山形へ出

張(四カ寺連携会議 於立石寺)。

花まつり打合せ会(法務 於

琥珀亭)。

十八日 総務部快俊、澄円、法務広元、

山形へ出張(四カ寺連携会議

於立石寺)。

金色堂温湿度監視計測シス

テム更新作業(十九日、管

財澄照立会)。

二十日 教区布教研修会(多田孝文師講話 大広間)。

一切経軸端調査(東博加島勝氏来山 二十一日)。

二十一日 町観光協会十五年度総会

(執事長・管財澄照 於商工会館)。

二十二日 衣川堤防工事に関わる発掘

調査現地説明会(公文研成寛・

管財澄照 北坂入口付近)。



総代・世話人会懇談会(執

事長・法務広元 於平泉(レスト)。

二十三日 中尊寺門前会研修会(二十四日、貫首・管財澄照他 気仙沼方面)。

町教育委員会表彰式(総務仁秀 於平泉郷土館)。

二十四日 執事長、一関市にて講話

(西磐井生徒指導連絡協議会研修会「心を耕す」 於豊隆会館)。

京博久保智康氏来山(京博特

別展への出陣打合せ 管財澄照)。

二十六日 両磐地区観光向上研修会

「もてなしの心」(総務・職員

三名出席 於ペリーノH)。

東北経済産業局電気工作物

検査(管財澄照立会)。

町上下水道事業運営協議会

(管財澄照 於町保健C)。

二十七日 一関信用金庫理事長八重樫次男

氏叙勲祝賀会(貫首・執事長

於ペリーノH)。

町都市計画マスタープラン

策定懇話会(管財澄照 於役場)。

二十八日 執事長、盛岡へ出張(北上

川リバーカルチャーアソシエイション発起人会 於Hメトロポリタン盛岡)。

宋版一切経等資料調査(仏

文研澄元・東北歴博政次氏、一日まで)。

町観光協会役員会(執事長)

◇三月

一日 月次大般若(本堂)

讚衡藏運営委員会(執事長・館長光中・管財澄照他 讚衡藏と議室)

三日 カメヤマローソク様 長椅

子三脚奉納(赤堂用)。

布教養成所研修会(〜四日、講師 後藤仁田師「悉曇の基礎と塔婆の書き方」 大広間)。

五日 総務部快俊、北海道へ出張

(〜七日、町観光キャラバン 札幌市教育委員会他訪問)。

七日 熊谷産業来山(原文法泉院庫

裡屋根修理の件打合せ 管財澄照)

九日 町合併問題セミナー(執事

長 於毛越寺レスト)。

十日 菊まつり役員会(春興 広間)。

十一日 般若寺前住職佐井川道秀師通

夜(貫首 随行光聰 於青森県中里町総合福祉会館バルナゴ)。

十二日 同葬儀(於中里町総合福祉会館)

町観光協会役員会(執事長)。

東京文化財研究所三浦定俊氏来山(金色堂保存環境調査のため、管財澄照立念)。

平泉東友会総会(総務部澄円 於平泉レスト)。

十五日 陸奥教区第一寺院会・檀

信徒会二〇名来山(貫首挨拶・章典案内)。

前江刺市長及川勉氏が任二十年を慰労する集い(貫首・参

拝慎有 於Hニュー江刺)。
十八日 町観光協会企画宣伝部会

(総務部澄円)。

十九日 基衡公御月忌(胎曼供 本堂)

お経を読む会(積善院)

二十日 水道事業業務委託契約(管

財部秀厚 於毛越寺レスト)。

春期一山会議(大広間)

二十一日 春彼岸会法要(法華三味本堂)

エジプト・ナイル川展オー

プニングセレモニー(貫首・

執事長 於北上川学習交流館)。

イラク戦争早期終結祈願法

要(本堂)

エジプト特命大使来山(貫首・執事長応援)。

北上川リバーカルチャーア

ソシエイション総会(貫首・執事長 於ヘリーノH)。

二十四日 開山会護摩供(開山堂)

世界遺産支援気仙沼市長他

来山(貫首応援)。
西行祭実行委員会(総務部快

俊他（於蔵日）。

二十五日 総務仁秀・澄円、仙台出張

（四寺廻廊会議 於仙台電通東北）

平泉景観問題委員会（執事

長 於役場 最終会）。

二十六日 岩手日日新聞社社長山岸健氏社

葬・貫首・執事長 於一関文化C）。

源義経公東下り行列保存会

総会（総務 於滝沢魚店）。

二十七日 仙台青葉能実行委員会（執

事長出向。於河北新報社）。

町世界遺産推進協議会理事

会（管財澄照 於役場）。

貫首、京都出向（二十九日、

五山会 於京都宝ヶ池プリンスH）

◇四月

一日 月次大般若（本堂）

二日 執事長、総務部澄円インタ

ビュー（岩手日日新聞社 四寺

廻廊について）。

三日 山内真珠院法事（自坊）

五日 総務仁秀、澄円、山形へ出

張（四寺廻廊会議）。

天台陸奥仏教青年会総会

（執事長 於毛越寺）。

六日 宋版一切経資料調査（仏文

研澄元・東北歴博政次氏、七七日）

八日 仏生会（本堂）

お経を読む会（金剛院）

町観光キヤラバン実行委員

会（総務仁秀・澄円）。

総代世話人会総会（執事長・

法務広元 於平泉レスト）。

九日 総務部澄円、新潟・山形へ

出張（十日、四寺廻廊PR）。

十日 陸奥教区寺庭婦人会岩手支

部総会（執事長 於毛越寺）。

十一日 JR北海道東北観光説明会

一行来山（総務部快俊案内）。

三条厚生年金受給者協会七

〇名来山（総務仁秀法話 かん

さん亭）。

執事長・総務部澄円、仙台

へ出張（JR東日本仙台支社）

町観光協会役員会（執事長）

十四日 総務部快俊、秋田へ出張（四

寺廻廊PR 秋田中央観光他）。

町世界遺産推進協議会総会

（執事長・管財澄照 於役場）。

十五日 能申合せ（大広間）

十六日 総務仁秀、澄円、山形へ出

張（四寺廻廊会議 於立石寺）。

源義経公東下り行列主要役

者発表（執事長 於役場）。

貫首・金色院執事澄順・陸奥

教区所長光中、滋賀へ出張

（西村公朝、瀬戸内寂聴両師、天

台宗特別功労賞親授式・記念公演

出席のため、随行章興 於天台宗

務庁）

「都市平泉」C G復元事業

制作委員会（仏文研成寛・管財

澄照 於役場）。

県南市町村監査員協議会二

五名来山。

十七日 観音講（山内観音院）

菊まつり協賛会総会（執事
長・春興 大広間）。

樹木医神山安生氏来山（表参
道樹木の樹勢診断及び樹勢回復治
療の打合せ、管財澄照・秀厚）

弁慶力餅競技保存会総会
（管財部秀厚 於泉そば屋）。

十八日 文化審議会文化財分科会よ
り白山神社能舞台、重要文
化財に指定の答申出る。

春の藤原まつり警備会議
（管財澄照・秀厚 於西行苑）。

十九日 陸奥教区寺院婦人会総会
（本堂）。

陸奥教区議会・一隅理事会
（大広間）。

二十日 恒例花まつり

二十一日 衣関桜友会清掃奉仕・観桜
会（執事長 管財澄照・秀厚）。

二十二日 中尊寺一山互助会・一山協
議会（広間）。

二十三日 日本経済新聞社取材（執事

長広接）。

商工会青年部総会（総務部快
俊 於商工会館）。

二十四日 ホテル武蔵坊社長鈴木和博氏
来寺（執事長・総務仁秀・参拝慎
有広接）。

一関地方振興局長土井氏来寺
（執事長広接）。

藤原まつり担当者打ち合わ
せ会（総務部澄円 於商工会館）。

二十五日 中尊寺作成のポスター、日
本観光協会リアルジャパン
特別賞を受賞。記者発表

（執事長 広間）。

二十六日 〈中尊寺鎮守白山神社能舞台再建
百五十年・重要文化財指定記念〉

讃衡蔵テーマ展「祈りと祭り」
はじまる（八月三十一日）。

毛越寺南洞貫主晋山式（貫
首・随行澄円）。

宋版一切経等資料調査（仏
文研澄元・東北歴博政次氏）。

八重樫貞子先生（裏千家）・
茶道関係者一行来山（茶室）。

二十九日 西行法師追善法要（本堂）
第二十四回西行祭短歌大会

（講師 岡井隆氏）
賞首賞「わが裡に顔もち上
ぐる何者かをひたすら抑へ
はほるみてをり」（菊池哲也
一関市）

三十日 能申合せ（能舞台）

◇五月 一日 春の藤原まつり開幕

藤原四代公追善法要、稚児
行列、常の如し。

郷土芸能奉演（胆沢町柳田念
佛剣舞）

執事長インタビュー（I B
C）。

二 日 開山護摩供（開山堂）
東下り行列主要役者歓迎レ

セプション（執事長・総務仁秀
於日武蔵坊）。

郷土芸能奉演（一関市市野々
神楽）

〈イラク戦争戦闘終結宣言〉

三日 源義経公東下り行列（秀衡
公役・増田岩手県知事、義経公役・
俳優の須賀貴匡）

郷土芸能奉演（衣川村川西大
念佛剣舞）

四日 古実式三番

神事能「竹生島」

郷土芸能奉演（胆沢町朴ノ木
沢念仏剣舞、胆沢町行山流都鳥鹿
踊、一関市市野々小学校鶏舞）

中国天台県国際交流員（栃
木県庁派遣）一行来山（貫首応
接）

五日 古実式三番

神事能「田村」

郷土芸能奉演（達谷毘沙門神
楽、江刺市行山流角懸鹿踊）

六日 山王講（山王堂）

七日 執事長・総務仁秀・澄円、

仙台へ出張（四寺廻廊会議 於
仙台電通東北）

讚衡威運管委員会（執事長・
館長光中・金色院執事澄順・仏文
研澄元・仏文研成寛・管財澄照・
管財部光聰・役席章興。於讚衡威
会議室）

八日 酒井雄哉阿闍梨来山（四寺
廻廊御朱印開眼法要の件について
貫首・執事長応接）

平泉菊花会総会（春興・秀厚
於泉そば屋）

九日 一関地区交通安全協会役員
会・理事会（管財部秀厚 於ダ
イヤモンドパレス）

十二日 「都市平泉」CG復元事業
制作委員会（仏文研成寛・管財
澄照 於役場）

十三日 岩手日日新聞東京支局長・
電通キヤップ来山（総務仁秀
案内）

表参道樹木の樹勢診断及び

樹勢回復治療始まる（樹木
医神山安生氏、八月二十日までの
間に延べ十四日間実施）

十五日 福井県勝山市市議会十名来
山（執事長案内）
観光キヤラバン（北海道）打
合せ（総務部快俊 於観光案内所）

執事長上京。（十六日、大正
大学出講）

東北歴博政次氏他来山（東北
歴博特別展「仙台藩の金と鉄」へ
の出陳に関する打合せ、管財澄照）

十六日 貫首、広間にて法話（フジ
テレビ系列各局報道部長十五名）
郡市仏教会総会（法務部章興
於あつつい屋）

十七日 仙台青葉能（貫首 随行澄照
於仙台市民会館）

十八日 貫首、山形にて講演（孝道
山東北別院「明日を生きる講演会」
随行快俊 於孝道教団東北別院本
仏殿）

山内観音院法事（自坊）

お経を読む会（円乗院）

十九日 編集会議（貫首著書『花咲け

みちのく 地に実れ』出版につい

て 貫首・執事長・慎有・仁秀・

澄照）。

毛越寺寿徳院御内室火葬

（一老 於釣山斎苑）

天台宗ハワイ別院住職荒了寛師

他来山（貫首心慈）。

二十日 筑波大附属駒場中生徒五名

自主学習の課題研究で来山

（管財澄照対応）。

貫首晋山十周年一山懇話会

（於音羽）。

二十二日 執事長・総務部澄円、東京

へ出張（四寺回廊PRでJTB・

近畿日本ツーリスト東京営業本部

訪問）。

毛越寺寿徳院御内室通夜

（於毛越寺寿徳院）

二十二日 毛越寺寿徳院御内室葬儀

（一老 於毛越寺）

二十三日 平泉をきれいにする会監

査・総会管財部秀厚 於役場）。

平泉商工会総会（総務仁秀

於商工会館）。

執事長、大正大学出講。

二十四日 宮内庁渡辺侍従長御夫妻来

山（執事長案内）。

毛越寺曲水の宴リハーサル

（貫首・随行章興 於毛越寺本堂）。

二十五日 毛越寺曲水の宴（貫首・随行

章興 於毛越寺）。

二十六日 一関地区交通安全協会総会

（管財部秀厚 ダイヤモンドP）

夕刻、三陸南沖地震

震度6（本堂・庫裡の壁に被害。

文化財及び電気・水道には大きな

異常なし）

二十七日 東京大学史料編纂所加藤友康氏

来山（執事長・管財澄照）。

二十八日 市町村合併を考える各種団

体との懇談会（執事長 於役

場）。

三十日 町観光キャラバン実行委員

会総会（執事長 於役場）。

中尊寺新能の会理事會（執

事長・管財澄照 於観光案内所）。

◇六月

一日 月次大般若（本堂）

中尊寺杯ソフトテニス大会

（於町営テニスコート）。

三日 平泉芭蕉祭全国俳句大会打

合せ（執事長 於役場）。

四日 伝教会（御影供 本堂）

五日 四寺廻廊打合せ（総務仁秀・

参拝慎有・総務部澄円 於毛越寺）。

六日 花巻空港台湾国際チャ一

ター便歓迎実行委員会総会

（総務部快俊 岩手労働福祉会館）

七日 町観光協会役員会（執事長）

町観光協会役員会（執事長）

子息他）来山（貫首心慈 茶室）。

八戸工大月館敏栄氏来山（日

本建築学会による三陸南沖地震災

害調査のため、管財澄照應對)

八日 法華經一日頓写經会(本堂)

九日 「都市平泉」CG復元事業
制作委員会(公文研成寛・管財
澄照 於役場)。

執事長、一関地方振興局講
話(国文化財から世界遺産へ)

関栄調理師会創立十五周年
記念魚鳥供養祭(総務仁秀
於H武蔵坊)。

十日 西行祭短歌大会役員反省会
(総務部快俊他 於一関文化C)。

十一日 金色院執事澄順・総務仁秀・
参拝慎有・法務広二元・総務部
澄円、山形へ出張(四寺廻廊
開眼法要準備のため 於立石寺)。

十二日 貫首、参務秀圓、執事長山
形へ出張。

慈覚大師報恩法要・「四寺
廻廊」御朱印開眼法要(於
立石寺)。

浄土宗尾張教区百名来山

(春興案内)。

十三日 社会保険説明会(総務部快俊
他 於一関文化C)。

執事長、八戸市へ出張(中
尊寺ポスター「リアルジャパン特
別賞」受賞式 於八戸プラザ)。

十四日 陸奥教区布教師会総会。

十五日 ウェーサカ讚仏会(法務広
元・章興 於龍玉寺)。

貫首、江刺市へ出向(えさ
し藤原の郷開園十周年記念式典
随行慎有 於藤原の郷)。

十六日 京都ライオンズクラブ一行
(IBC菊地会長案内)二十五
名来山(貫首法話・執事長案内)

十八日 観光道路周辺清掃(平泉をき
れいにする会主催、執事長・管財
澄照・秀厚他 観光道路周辺)。

二十日 自在坊蓮光忌法要(本堂)

二十四日 花泉町教育長増子氏他二名来
寺(執事長応接)。

二十五日 町観光キャラバン実行委打

合せ(総務部快俊 於観光案内所)。

二十六日 総務部澄円、山形出張(東北
地方観光宣伝協議会プレゼンテー
ション 於天童温泉滝の湯日)。

教育旅行誘致宣伝部会総会
(総務部快俊 於盛岡Hメトロポ
リタン)。

二十八日 町観光キャラバン実行委打
合せ(総務部快俊)

二十九日 芭蕉生誕三百六十年記念
第四十二回平泉芭蕉祭全国
俳句大会(貫首・執事長 於毛
越寺)。

三十日 総務部快俊、北海道へ出張
(七月四日、町観光キャラバン)

◇七月

一日 月次大般若(本堂)

六日 総務仁秀、秋田へ出張(七
日、源義経公東下り行列保存会研
修旅行 秋田方面)。

七日 日光月蔵寺様来山(貫首案内)。

八日 熊本日日新聞情報文化センター林

- 田真氏・熊本市鶴屋百貨店尾
田芳孝氏他二名来山（九月
開催希望の「中尊寺と平泉の文化
展」の件 執事長応接、管財澄照
と打合せ）。
- 水かけ御輿警備会議（管財
部秀厚 於商工会館）。
- 九 日 警察友の会総会（執事長 於
豊隆会館）。
- 十 日 堤防施工に伴う衣川橋の対
応に関する懇談会（執事長
於役場）。
- 宋版一切経等資料調査（仏
文研澄元・東北歴博政次氏）。
- J R 「こがね」試乗会（総
務部澄円 気仙沼・仙台）。
- 十一日 町消防交友会総会（管財澄照
於毛越寺レスト）。
- 十二日 世界遺産塾講座来山（管財
澄照案内）。
- 平泉文化会議所総会（執事
長 於郷土館）。

- 十三日 如法写経十種供養会、頓写
法華経奉納式
東大史料編纂所石上英一所長
及び外国人研究者来山
（Japan Memory Project主催「古代
都市平泉巡検」執事長・管財澄照・
秀厚案内）。
- 十四日 貯水槽清掃（管財部）。
- 十五日 町観光キャラバン実行委打
合せ（総務部快俊 於観光案内所）。
- 東北歴博特別展「仙台藩の
金と鉄」に巡礼納札二点を
貸出（政次浩氏、管財澄照立会）
「都市平泉」CG復元事業
法要シーン撮影（金色院執事
澄順・法務広元・管財澄照他 大
広間）。
- 十六日 町観光協会役員会（執事長）
- 十七日 清衡公御月忌（胎曼供 本堂）
世界文化遺産登録指導委員
会（執事長 於役場）。
- 十九日 J R 「こがね」出発セレモ

- 二十日 平泉総社神輿渡御
富岡八幡宮神輿連合会との
交流会（執事長 於日武蔵坊）。
- 二一（執事長 於仙台駅）。
- J R 「こがね」平泉駅歓迎
セレモ二一及び巡回バス
「るるるん」出発式（執事長）
平泉水かけ神輿宵宮（執事
長 於観自在王院）。



中尊寺ハス発熱調査（岩手大学農学部伊藤助教、管財澄照立念）。

二十一日 赤堂総代・世話人会（執事長・金色院執事澄順・法務広元）。

二十三日 金銀装舍利壇搬出（修理のため東博修理室へ、管財澄照立念）。

陸奥教区第二部檀信徒会総会（法務広元・総代 於毛越寺）。

二十四日 京博久保智康氏ほか、出陳予定の資料を撮影のため来山（管財澄照立念）。

執事長、一関市で講話（「身近にあるものが見えない」たばこ組合 於ダイヤモンドP）。

執事長・総務仁秀・法務広元・総務部澄円、仙台に出張（四寺廻廊打合せ 於仙台電通東北）。

宋版一切経等資料調査（仏文研澄元・東北歴博政次氏、二十五日まで）。

大文字まつり警備会議（管財澄照・秀厚 於西行苑）。

二十五日 讚衡蔵運営委員会（執事長・館長光中・管財澄照他）。

二十八日 「都市平泉」CG復元事業制作委員会（仏文研成寛・管財澄照 於役場）。

二十九日 平泉芭蕉祭全国俳句大会反省会（執事長 於役場）。

三十日 町世界遺産推進協議会役員会（執事長 於役場）。

三十一日 恵泉女学園園芸短大教授長島時子氏来山（八月一日、中尊寺ハス開花状況視察 管財澄照・秀厚）。

◇八月

一日 月次大般若（本堂）

大矢邦宣氏を中尊寺仏教化研究所専門研修員に委嘱。

二日 文化庁美術芸芸課伊東史朗氏来山（金色堂諸仏調査の件、執事長・管財澄照応接）。

三日 北上市和賀にて中尊寺ハス観賞会。執事長講話（歴史の中に何が見えるか）

四日 十五日半、〈平和の鐘〉打鐘。

五日 衣関桜友会境内清掃奉仕（管財部秀厚 開山堂付近）。

六日 大文字まつり担当者打合せ会（法務広元 於八つ花）。

七日 夏堂籠り（結果動、十一日まで開山堂）

町観光キャラバン実行委員会（総務部快俊・澄円）

芭蕉像製作者戸津圭之介氏来山（芭蕉像の状態視察 参務光中 応接）。

讚衡蔵運営委員会

八日 平泉をきれいにする会「ゴミの持ち帰り運動実施」（管財部秀厚 於平泉前沢IC）。

十日 梵焼供（結果動 常の如し）

山内大徳院法事（本堂）

十一日 宋版一切経等資料調査（仏

文研澄元・東北歴博政次氏。

十二日 熊本日日新聞社林田氏・日本通

運熊本支店伊藤健二氏来山

〔中尊寺と平泉の文化展〕打合せ、

管財澄照応対)

十四日 第二十七回中尊寺新能

能「羽衣」(佐々木多門師)

狂言「鎌腹」(野村万作師)

能「烏頭」(佐々木宗生師)

薪奉行 一力正彦氏・清水

慎一氏・合田武氏

トヨタ名誉会長豊田章一郎氏

夫妻・関東自動車社長内川晋

氏夫妻他四名来山(執事長案

内)。

十五日 町成人式(執事長 於郷土館)

文化財愛護少年団研修(平

泉ユネスコ協会主催 本堂廊下清

掃・募金活動・管財澄照)。

十六日 第三十九回平泉大文字まつり

十八日 佐野美術館・大阪歴博・一

関市博特別展に出陳されて

いた重文清衡棺上刀他一点

返却(佐野美術館渡邊館長来山

管財澄照立会)

十九日 総務部快俊、花巻市へ出張

(県観光協北海道教育旅行研修会

於H千秋閣)。

二十日 観福寺施餓鬼会(澄順他参席)

毛越寺施餓鬼会(秀圓参席)

札幌市内中学校教諭一行二

十名現地研修に来山(総務

部快俊案内)。

二十一日 花巻・遠野・平泉観光推進協主催

JTB教育旅行担当者一行

十名来山(総務部澄円案内)。

古都平泉ガイドの会(ボラ

ンティアガイド)設立総会(執

事長 於役場)。

二十三日 大施餓鬼会御逮夜(本堂)

二十四日 大施餓鬼会・放生会(本堂)

二十五日 執事長、花泉町にて講話

(岩手県南・宮城県北公民館職員

研修「歴史とは何か」)

二十六日 平泉をきれいにする会花壇

コンクール審査(管財部秀厚

於役場)。

熊本市鶴屋百貨店での「中

尊寺と平泉の文化展」開催

のため「義経画像」ほか十

二点を貸出(熊本日日新聞社林

田氏・日本通運熊本支店伊藤氏来

山、管財澄照立会)

國學院大吉田敏弘氏他来山、

〔陸奥国骨寺絵図〕調査、管財部

光聴立会)。



月見坂で老杉倒れる(8月27日)

二十七日 社会を明るくする運動実施

委員会（執事長 於役場）

月見坂で老杉倒れる（後日
伐採処理）。

二十八日 大正大学OB会二十一名来
山（管財澄照案内）。

和賀公民館来山（貫首・参務
光中・執事長応接）。

中国天台山国清寺一行十三
名来山（貫首挨拶・執事長案内）。

二十九日 貫首盛岡へ出向（JABAS
「実学の森」於Hメトロポリタ
ン盛岡N・W）。

執事長、商工会館にて講話
（観光ガイド養成講座）。

町上下水道事業運営協議会
（管財澄照 於役場）。

三十日 執事長、本堂にて法話（中
高年の坐禅会六十名）。

執事長、盛岡出向（JABA
S「実学の森」於県立大）。

宋版一切経等資料調査（仏

文研澄元・東北歴博政次氏）。

首都圏教育旅行担当者（県
観協主催）一行来山。

講演とボサノバ・ギター
（中高年の坐禅会 於かんさん亭
龍玉寺施餓鬼会（二老参席）
紫波町蜂神社祭礼（成寛参席）
赤堂祭礼打合（法務 於桜川）

◇九月

一日 月次大般若（本堂）
参拝慎宥、瀬見温泉出張
（亀割観音例祭・法務部章興随
行）
管財澄照、熊本市へ出張
（四日、熊本日日新聞社主催
「中尊寺と平泉の文化展」展示
会、於熊本市鶴屋百貨店）。

二日 貫首、執事長、熊本市へ出
張（四日、「中尊寺と平泉の文
化展」のため）。

三日 泰衡公御月忌（金曼供 本堂
立石寺様団参三十名来山
（澄順挨拶 澄丹案内）。

熊本日日新聞社主催「中尊寺と
平泉の文化展」開催（九
日、於熊本市鶴屋百貨店）。

金色堂諸仏調査（十日、文
化庁美術学芸課伊東史朗氏他、管
財澄照立会）。



- 九日 大矢郷土館館長講演（平泉
町観光商工課三十名 於かんざん
亭）。
- 十日 総務仁秀、札幌へ出張（十
二日、県観協教育旅行説明会 於
Hニューオーター二）。
- 十一日 金色堂諸仏入魂法要
- 十二日 平泉東友会設立十周年記念
式典（参拝慎有 於H武蔵坊）。
- 東北歴博特別展「仙台藩の

- 金と鉄」に出陳していた巡
礼納札二点返却（政次浩氏来
山、管財澄照立会）
- 十三日 参務秀円、紫波町出張（五郎
沼業師神社例大祭）
「中尊寺と平泉の文化展」
に出陳の「義経画像」ほか
十二点返却（熊本日日新聞社林
田氏来山、管財澄照立会）
- 十四日 世界遺産フォーラム（執事
長 於H武蔵坊）。
- 十五日 町敬老会（執事長 於平中体育
館）。
- 十六日 国宝「金銅華鬘」ほか九件
の宝物を京都に搬出（京博
特別展「金色のかざり」に出陳。
尾野善裕・羽田聡氏来山、管財澄
照立会）。
- 十七日 白符忌（本年より藤原経清忌
始行、本堂）
- 十八日 宋版一切経等資料調査（仏
文研澄元・東北歴博政次氏）。

- 十九日 今春聴大僧正二十七回忌法
要（本堂）
赤堂稻荷例祭（護摩供）
- 二十一日 『花咲けみちのく地に実
れ』貫首出版記念祝賀会
（於H武蔵坊）。
- 二十二日 朝日新聞社一関通信部相馬全氏
他二名来山（貫首・執事長応援）。
- 二十三日 秋彼岸会法要（常行三昧 本堂）
お経を読む会（釈尊院）
- 二十四日 管財澄照、盛岡へ出張（県文
法泉院庫裡屋根修理について、県
教委ヒアリング）。
- 二十六日 町観光協会役員会（執事長
於H武蔵坊）。
- 青山学院大浅井和春氏、研究
室の学生を引率して来山
（管財澄照案内）。
- 紫波町議会・平泉町議会交
流会（管財澄照 於H武蔵坊）。
- 野村萬斎氏長男狂言初舞台
記念公演会（慎有・澄元・澄円

上京。於国立能楽堂。

二十八日 県史跡長者原廃寺跡発掘現地説明会（仏文研成寛・管財澄照 於衣川村）



二十九日 文化財建造物保存事業技術者十名来山（引率 文建協 窪寺茂氏、仏文研澄・元案内）。

ワキ方稽古和泉昭太郎師来山（康純・秀厚・光聰 大広間）。

三十日 総務部快俊、東京へ出張（県

観光協会主催教育旅行誘致説明会 於日エドモンド）。

J A 南岩手懇談会（執事長・管財澄照 於音羽）。

防災講習会（管財部秀厚・章興 於二区公民館）。

◇十月

一日 月次大般若（本堂）

陸奥教区宗務所教区会及び一隅理事会（大広間）。

町社会福祉大会（管財部秀厚 於毛越寺レストハウス）。

二日 慈眼会（本堂）

三日 町観光キャラバン実行委員会（総務部快俊・澄円 於役場）。

一関農高、関農を讃える会

記念植樹除幕式（執事長 中尊寺遊歩道四阿付近）。

静岡県富士市教育委員会一行来山（執事長案内）。

四日 県ユネスコ五十周年記念狂言の

会（貫首・随行澄円 於盛岡市）。

六日 執事長、本堂にて法話（四寺回廊・義経・世界遺産登録について 一関地方振興協会二十四名）。

NHK大河ドラマ「義経」関連事業計画事前検討会（総務仁秀・管財澄照 於役場）。

北東北三県シンガポール事務所現地スタッフ研修来山（総務案内）。

能申合せ（大広間）

七日 貫首、本堂にて法話（東日本ブロック六税理士会正副会長連絡会議一行来山）。

菊まつり協賛会役員会（春興・管財 大広間）。

八日 岩手日日新聞社創立八十周年・社長就任祝賀会（金色院執事澄順 於ダイヤモンドP）

堤防施工に伴う衣川橋の対応に関する懇談会（執事長岩手工事事務所主催 於役場）。

九日 貫首、盛岡にて講話（全国

自治体病院連合会 随行章興 於
岩手県民会館中ホール）。

十日 NHK大河ドラマ「義経」脚

本家金子氏他四名来山（貫
首応接）。

執事長、盛岡にて講話（全

国自治体病院連合会 於プラザお
でつて）。

暴力団追放一関地区大会

（総務部快俊 於毛越寺レスト）。

十一日 讚衡蔵第二回館蔵品展「小

さく貴いもの」―金色堂須
弥檀内副葬品―はじまる

（十一月三十日）。

十四日 多摩美術大学造形学科研究

室一行来山（執事長講話）。

十五日 町観光パンフレット改訂打

合せ（総務部澄円 於役場）

十六日 第六回仙台青葉能反省会（執

事長 於仙台北新報社）。
テレビ朝日「ニュースステー

ション」撮影打合せ（総務

部快俊・澄円）。

十七日 江刺「ほむらの会」研修旅

行（十八日、貫首・慎宥同行
於瑞巖寺・立石寺）。

執事長、本堂にて法話（青

森きたぎん会十一名）。

総務部快俊・澄円、仙台へ

出張（四寺廻廊事務連絡会議 於
仙台電通東北）。

十九日 お経を読む会（法泉院

岩手日報広華会主催狂言の会
（執事長 於一関文化C）。

貫首、群馬県にて講話（

二十日、群馬県渋川ロータリーク
ラブ一三〇〇名 於渋川市民会館）。

世界文化遺産講演会（講演

吉村作治氏 於小平体育館）。

白虎堂例祭（山内薬樹王院）。

二十日 菊まつり開幕法要

群馬県常住寺様一行九名来
山（総務部澄円案内）。

二十一日 NHK大河ドラマ「義経」に

係る事前検討会（管財澄照・

総務部澄円 於役場）。

二十二日 JA島根県・岩手県五連会

長来山（執事長案内）。

能申合せ（能舞台）

二十三日 讚衡蔵委員会（執事長・館長

光中・管財澄照他）

二十四日 江刺ほむらの会来山（四寺

廻廊の旅の御礼 貫首応接）。

佐川美術館顧問河田貞氏、同事

務局長稲熊恒久氏来山（執事

長・管財澄照応接）

二十五日 執事長、鳴子へ出張（二

十六日、第十六回奥の細道鳴子サ
ミット 於Hオニコウベ）。

日本庭園協会東北支部一行

九名来山（総務部快俊案内）。

貫首、盛岡にて講話（第八

回ユネスコ県大会、随行澄照 於

H東日本）。
二十六日 岩手日日新聞社副社長佐藤

一 巳氏通夜（執事長参列）。

二十七日 町観光キヤラバン実行委員
会打合せ（総務部澄円）

二十八日 秀衡公御月忌（金曼供 本堂）

二十九日 テレビ朝日「ニュースステ
ーション」スケジュール打合

せ・撮影（管財・総務立会 金
色堂・讃衡蔵）。

三十一日 五木寛之氏来山（貫首 茶室）。

テレビ朝日「ニュースステ
ーション」中尊寺より中継。



夜の生中継のため特別に経蔵がライトアップされた。

◇十一月

一日 秋の藤原まつり開幕

藤原四代公追善法要、稚児
行列、常の如し。

郷土芸能奉演（胆沢町柳田念
佛剣舞、江刺市行山流角懸鹿踊）

二日 菊供養会（本堂）

郷土芸能奉演（胆沢町行山流
都鳥鹿踊、一関市市野々小学校鶏
舞）

平泉町産業文化祭（総務部快
俊 於役場）。

三日 松島瑞巖寺晋山式（参務秀圓
参席 於瑞巖寺）。

白山神社再建百五十年奉告
祭（慶祝 能舞台重文指定 祭儀、
貫首・参務光中参列 於白山神社）。

中尊寺能「紅葉狩」（能舞台）

白山神社祝賀会（貫首・参務
光中・執事長・管財澄照・役席章
興出席 於平泉レスト）

郷土芸能奉演（平泉町達谷毘

沙門神楽、衣川村川西大念佛剣舞）

五日 浄土宗東京極楽寺様団参
（執事長案内）。

七日 一関農業高等学校閉校式
（執事長 於一関農高体育館）。

日光石屋町一行十八名来山
（貫首案内）。

執事長、一関にて講話（岩
手経済同友会 於ペリーノH）。

九日 菊まつり表彰式（今年より国
土交通大臣賞設定）

十日 如法写経十種供養会（本堂）
北上川リバーカルチャーA
幹事会（執事長 於ペリーノH）。

町観光キヤラバン実行委打
合せ（総務部快俊）

イラク戦争早期終結祈願

戦争に「正しい戦争」というものはありません。

十二世紀、中尊寺を創建された藤原清衡公の願いは、まさに戦争の否定「非戦」でした。今、二十一世紀になっても、人間は同じようなことをしているわけです。

テロはむろん否定されるべきです。が、また報復も正当化されるものではありません。

「怒みをもって怒みに報いければ、怒み止むことなし」です。

脅威を除くために爆撃することは、それ自体が、それ以外の国々にとっては脅威にもなりかねません。

あくまで国連の枠組みのなかで対応するのが、世界の約束なのです。

ベトナムから三十年、湾岸戦争から十二年、そしてまた今――

戦争は、人間の心から起こるのです。一人ひとりが、「非戦」を心にしっかりと意識し、持ち続けることが大切です。

平成十五年三月二十一日

天台宗 中尊寺

合掌

五月二日、米大統領はイラクでの戦闘状態の終結を宣言しました。

しかし、テロの標的は拡大し、民間人も多数命を落としている惨状が、連日のように報じられております。駐日エジプト大使ヒシャム・パドル氏は「治安を強化しても平和は獲得できない」と（朝日）。民主も自由も、将来も大切ですが、今こうして、人の命が奪われてもいい、ということにはなりません。

御奉納者 御芳名

平成十四年十一月～平成十五年十月

一、北坂地藏尊像 灯籠移設補修

平泉町 岩淵 汪様

岩淵孝二様

葛西文治様

一、御供用餅米 五斗

衣川村 千葉卓治様

一、境内景観整備用樹木

花泉町 千葉達夫様

(仙台萩・アカメソロ・ムラサキシキブ・モクロ樹・夏椿・萩)

一、境内景観整備用樹木

「閑農を讃える会」様

(いろは紅葉百本・山桜三十本・いたや紅葉三十本・えごの木二十本・やまぼうし二十本・でしよじよ紅葉三十本、尚、三月末までにいろは紅葉八十本が追加植栽される予定)

一、注油器(不滅法灯護持用)

平泉町 銅盛鋳金工業様



浄財御奉納者 御芳名

平成十四年十一月一日～平成十五年十一月十日

天台宗陸奥教区 第一部檀信徒会様	三万円	東京大学 石上英一様	五万円
神奈川県 大聖院様	三万円	勲佐野美術館・大阪歴史博物館・一関市博物館様	
群馬県 常住寺様	九万円	立石寺参拝団様	三万円
石川悦子様	十六万円	浄土宗 岩手県教区様	五万円
孝道山東北別院様	三万円	酸素愛好会様	三万円
宮内庁侍従長渡辺允様	三万円	東北税理士会様	五万円
大平裕様	十万円	第四十二回全国自治体病院学会長様	六万円
清和会 佐藤芙蓉様	十二万円	日光観音寺 千田孝明様	三万円
和堂先生写経会有志一同様	二十万円	日光観音寺講様	十万円
栃木県 大慈寺様	五万円	日光日好会様	三万円
日光 天王寺様	三万円	(有)平泉観光写真社様	五十万円
一関信用金庫 平泉支店様	六万円	東京 駒込学園様	三万円
日光 月蔵寺様	三万円		
川嶋印刷(株)様	十一万円		

八葉山 天台寺様

大聖院 (大正大学教授) 多田孝文様

山田雪様

青森県 般若寺様

岩手日日新聞社様

土谷仁雄様

栃木県第一宗務支所様

(株)NHKエデュケーショナル様

狛江市 三好玲子様

一関地方法人会女性部様

東京 極楽寺様

東京 市川笑子様

栃木県 石屋町自治会様

東京 塩谷徹様

◇「三陸南沖地震」地震見舞

左記の方々よりお見舞いを頂戴した

三万円

(株)安田念珠店様

京都市左京区 實光院様

愛知県 茶谷きみゑ・和夫様

千葉県 本田信夫様

養泉院 藤崎道正様

念法眞教総本山金剛寺様

不動尊篤信御奉納者御芳名

平成十四年十一月～平成十五年十月

北海道 富良野市	南砂利工業(株)様	三万五千元	宮城県 宮城郡 宮城町	精茶百年本舗(株)様	三万円
北海道 小樽市	村口初男様	季毎御供物	宮城県 宮城郡 宮城町	(有)ケーテック代表	七万円
青森県 平賀町	笠原山不動院代表 小笠原喜世様	七十七万四千元 御供物・献酒	宮城県 仙台市 宮城郡 宮城町	桜町中学校同級会様	四万八千元
青森県 南部町	工藤銀四郎様	月毎御供物	宮城県 仙台市 宮城郡 宮城町	金成工務店様	三万円
青森県 七戸町	故盛田悠三様	三万五千元	宮城県 仙台市 宮城郡 宮城町	熱海章様	三万円
二戸市	米沢励様	月毎御供物	宮城県 仙台市 宮城郡 宮城町	沼田とも子様	月毎御供物・献酒
滝沢村	齋藤實、ツコ様	四万四千元	宮城県 仙台市 宮城郡 宮城町	小島ヒデ子様	御供米
北上市	高橋喜徳郎様	三万円	宮城県 仙台市 宮城郡 宮城町	樋口武夫様	三万円
水沢市	佐々木久様	三万円	宮城県 仙台市 宮城郡 宮城町	千葉勝幸様	三万円
平泉町	平泉中学校昭和52年会様	八万六千元	宮城県 仙台市 宮城郡 宮城町	桜井高志様	三万円
	(有)千葉製材所様	三万円	宮城県 仙台市 宮城郡 宮城町	(株)スタンドサービズ代表 吉田幹夫様	三万円
	平泉中学校第十二回卒業生 還暦祝同級会様	十八万六千元	宮城県 仙台市 宮城郡 宮城町	藤枝恵枝子様	季毎御供物
一関市	(有)豊隆軌道 千葉幸八様	五万五千元	宮城県 仙台市 宮城郡 宮城町	松原クリーニング店 松原晴樹様	季毎御供物・献酒
	川嶋印刷(株)様	十万円	宮城県 仙台市 宮城郡 宮城町	(有)ウワノ工務店代表 上野聖人様	三万円
			宮城県 仙台市 宮城郡 宮城町	矢鋪雅子様	三万円
			宮城県 仙台市 宮城郡 宮城町	辻林正博様	六万円・献酒